三重大学統合報告書2020

国立大学法人 三重大学

三重大学統合報告書 2020

ご支援のお願い

三重大学振興基金

- 学生（留学生を含む）の修学支援事業
- 教育研究環境の整備等に必要な支援事業

に活用させていただくため、三重大学振興基金を開設しています。
皆様の温かいご支援・ご協力をお願いいたします。
寄附のお申し込み等はこちらから

三重大学振興基金　検索

三重大学振興基金事務局（企画総務部総務チーム内）
〒514-8507 三重県津市栗真町屋町1577
TEL 059-231-9005　FAX 059-231-9000
E-mail kikin@ab.mie-u.ac.jp

国立大学法人
三重大学
〒514-8507 津市栗真町屋町1577
TEL 059-232-1211（代）

2020年10月

三重の力を世界へ

地域に根ざし、世界に誇れる
独自性豊かな教育・研究成果を生み出す。
～人と自然の調和・共生の中で～

基本理念

三重大学は、総合大学として、教育・研究の実績と伝統を踏まえ、
「人類福祉の増進」「自然の中での人類の共生」「地域社会の発展」に貢献できる
「人材の育成と研究の創成」を目指し、学術文化の受発信拠点となるべく、切磋琢磨する。

Contents

03 学長メッセージ／三重大学を創る6つのビジョン
05 特集
実践的数理・データサイエンス素養を養う教育の実現
07 特集
充実した学びが生まれる教職支援センター
09 三重大学の概要
13 教育
21 研究
23 社会連携・地域貢献
31 国際交流
35 環境
37 医学部附属病院
43 決算状況
49 ウェブページのご案内

学長メッセージ

進化する大学を目指す

三重大学は美しい自然環境の中にあります。伊勢湾の海の翠、鈴鹿山脈や布引山地の樹々の翠、そして白い雲が浮かぶ翠の空、3つの翠（三翠）に囲まれた環境に優しい大学です。三重大学は、昭和24年の建学以来の伝統と実績に基づいて、「三重の力を世界へ：地域に根ざし、世界に誇れる独自性豊かな教育・研究成果を生み出す～人と自然の調和・共生の中で～」を基本的な目標として掲げ、地域社会や住民の皆様との緊密な連携をとりつつ、「人類福祉の増進」「自然の中での人類の共生」「地域・国際社会の発展」に貢献できる「人材の育成と研究の創成」に取り組んでいます。

しかし現在、新型コロナウイルス感染症の流行のために、大学の活動形態が大きく変わろうとしています。教育・研究活動に関しては、感染予防の観点から、一部の研究・実習を除いて、対面授業からオンライン授業に移行しており、そのために、多くの学生は大学キャンパスの講義室、研修室ではなく、それぞれの自宅等にて、インターネットを介した授業を受けることを強いられています。課外活動を含め、学生同士、あるいは教員と学生の交流も著しく制限されています。もちろん、教育・研究の手法が変わったからと言って、学ぶべき知識・技能、身につけるべき能力が変わるわけではありません。研究による真理の探究、独創性豊かな研究課題等も、大きく変更しなくてはならないものでもありません。ただし、実際の教育・研究活動の現場では、大きな制限を受けていることは事実です。三重大学は、コロナ禍という状況の中で、試行錯誤しながら、進化した教育・研究活動を進めていきます。

現代社会においては、少子高齢化、人口減少が進行し、人工知能、IoT、ビッグデータやロボティクスの急速な発達と普及により、パラダイムシフトが進んでいます。また、都市部と地方との社会格差は広がり、地域の創生、活性化も待った無しの状況です。エネルギー環境問題の深刻化、グローバル化の急速な進行も指摘されています。このような困難な時代にこそ、大学の真価が問われ、大学への期待はますます大きくなってきているように思います。三重大学の諸先輩は、すでに半世紀も以前に「公的立場にとらわれず、自由で主体的な活動が必要であり、縦割りではなく横のつながりを深めていくことが極めて重要である。学習活動の在り方としては、他から与えられるものではなく、自分で努力して身につけていくべき」と指摘されています。自分自身の狭い縄張りに固執しない脱管理、自由度の増した「学問の場」である大学は、とても魅力的な存在です。コロナ禍においても、その魅力を損なうことのないよう、むしろ、この機会を捉えて、新しい魅力が付加され、進化した大学を目指したいと考えています。

三重大学長　駒田美弘

三重大学を創る6つのビジョン

1 安心感のある運営と改革

学長のリーダーシップ
第3期中期目標に定められた“持続的な競争力と高い付加価値を生み出す大学の構築”と教職員の生活を守る大学運営に、リーダーシップを発揮します。

分析企画力の向上
IR（機関調査）機能を強化し、適切な業務分析に基づく透明性のある大学改革を前進させます。

財務基盤の強化
附属病院を効率的、安定的に経営し、大学の財務基盤を強化します。

2 社会の未来を創る高等教育

大学の役割の明確化
地域圏唯一の国立大学法人としての役割を明確化し、三重大学の強みを活かした教育研究活動を実践します。

リーダーの育成
本学の教育目標に掲げる「感じる力」、「考える力」、「コミュニケーション力」、「生きる力」を発揮し、社会を牽引する自立したリーダーを育てます。

高度専門職業人の養成
教養教育の充実とともに学部専門教育、大学院教育の進展を図り、高い教養を持って社会で活躍する高度専門職業人を養成します。

3 女性・若手に優しいキャリア支援

子育て世代に優しい職場環境
保育施設の整備、病児保育や学童保育の拡充、タイムシェアリングに取り組み、ワークライフバランスに配慮した家族と子どもに優しい環境を創ります。

女性教職員の積極的登用
女性の視点を大切にし、女性教職員のキャリア支援を推進します。

若手教職員の成長支援
テニュアトラック制度、研究支援体制、教職員の能力向上を目指すSD/FDを充実させ、若手教職員の成長を支援します。

4 大学発の地域イノベーション

地域活性化の拠点形成
地域活性化の中核的拠点機能の充実に向けて、地域イノベーションをさらに進展させます。

産学官民連携の推進
産業界や行政、NPOへの積極的な支援と地域大学間ネットワークの構築を推進し、知的財産の創造、技術革新の創出を実現します。

大学主導の地域創生
地場産業の振興、地域医療の充実、防災減災などの地域課題に取り組み、持続性のある魅力的な地域創生に貢献します。

5 多様で独創的な学術研究

研究基盤の整備
日本の将来を拓く“研究の多様性”を維持し、研究者の持つ意欲・能力を最大化する研究実施基盤と研究費獲得基盤を整備します。

多分野融合型研究の活性化
総合大学の強みと中規模大学の機動力を活かした多分野融合型研究を活性化させます。

研究成果の社会への還元
研究成果を積極的に発信し、地域社会と国際社会の持続発展に寄与する大学を目指します。

6 自然と共生するグローバル・キャンパス

教育研究環境のグローバル化
外国人留学生獲得と外国人教員招聘、海外拠点形成を強化し、グローバル・キャンパスを実現します。

世界から評価される教育研究水準の達成
国際通用性のある教育、学生の留学、教職員の海外研修、国際共同研究を推進します。

自然豊かなグリーン・キャンパス
学生と外国人留学生が、自然豊かで快適な環境で共に学ぶグリーン・キャンパスを目指します。

特集 実践的数理・データサイエンス素養を養う教育の実現

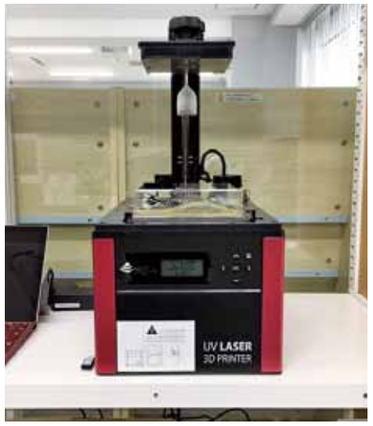
数理・データサイエンス館 Center for Mathematical and Data Science（CeMDS）～Society5.0の実現に向けて～

デスクトップパソコンが並ぶ教室で行う情報教育が普通であった20年程前、三重大学生物資源学部資源循環学科は、情報技術を自由に扱える人材を育成するため、改組2年目、2001年度入学生に対して、いち早くノートパソコン必携化を取り入れ、情報教育や実験実習を始めました。このノートパソコン必携化は、生物資源学部全学科へひろがり、2018年度には全学部が取り入れることになりました。また、並行して情報リテラシー教育の基盤となる学習管理システム三重大学Moodleや教育機関向けクラウドサービス（Microsoft Office 365, Google G Suite）を導入するなど、ノートパソコンをフルに活用するための環境の整備を進めてきました。

そのような中、第5期科学技術基本計画において日本が目指すべき未来社会の姿として、狩猟社会（Society1.0）、農耕社会（Society2.0）、工業社会（Society3.0）、情報社会（Society4.0）に続く新たな社会であるSociety5.0が提唱されました。Society5.0のようなデータ駆動型社会の実現のためには、IoT、ビッグデータ、人工知能（AI）等を扱える人材が必要とされます。先進的な情報リテラシー教育を推進してきた本学ではありますが、Society5.0に加え国連が提唱するSDGs（持続可能な開発目標）に対応することからも、情報教育の基盤的な改革を行うことになりました。数理・データサイエンスは今後のデジタル社会の基礎的知識として重要視されています。本学においても全学生に、数理・データサイエンスの基礎を修得してもらうため、現在、教養教育科目である「情報科学基礎」の刷新に取り組んでいるところです。

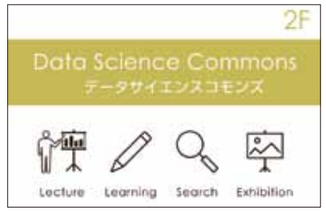
数理・データサイエンス館（CeMDS「セムズ」）は、本学の数理・データサイエンス教育やICT教育等の発展に寄与するとともに、地域の企業や自治体との連携を図り、地方創生に貢献する拠点として、2020年4月開館しました。

CeMDS は、3階建ての旧教養教育4号館を全面改修することで建設しました。ガラス張りの1階には、CeMDSの文字が施され、おしゃれな外観になっています。



サポートデスク

Maker Commons（メイカーコモンズ）には、サポートデスクとメイカースペースがあります。サポートデスクでは大学生活におけるICTの相談ができるICTサポートと、文献検索方法やレポートの書き方などについて相談ができるラーニングサポートを行っています。スタッフは大学院生、教員、ICTコーディネーターです。メイカースペースは3Dプリンタやレーザーカッターなどを自由に使える「工房」で、VRゴーグル、ドローンなどの体験も出来ます。ICT機器で作成した作品の展示コーナーも見どころの1つです。



レクチャールーム

文献検索コーナー

Data Science Commons（データサイエンスコモンズ）には、レクチャールームと文献検索コーナーがあります。ここでは今後、本学が開催したフォーラムや公開講座について、自由に閲覧することができるようになり、地域創生への取組の一つとして設置した4つの地域拠点サテライトで積極的に開催しているフォーラムや公開講座、このサテライトを中心とした企業や自治体との共同研究等についてもアーカイブされる予定で、本学の教育研究の向上と地域創生の取り組みへの活用が期待されます。

数学なんでも相談室

学生に人気の「数学なんでも相談室」は、Collaboration Commons（コラボレーションコモンズ）にあります。ミーティングルームやスタジオを設けており、様々なニーズに対応します。

2020年7月現在、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、残念ながらCeMDSは閉館中ですが、サポートデスクは授業オンライン化に伴い、たくさんの学生が利用しています。

一日も早く学生がキャンパスに戻り、このCeMDSで元気な歓声があがることを願っています。

サポートデスクマスコットキャラクター
メリヤスさん と ヤギ先輩

特集 充実した学びが生まれる教職支援センター

生まれ変わった院生同士の学び合いの場

2019年9月に、教育学部附属教職支援センター耐震改修工事が完成し、センター内には、新しい院生自習室と院生協働学習室ができました。教職大学院授業は、主にセンター内のレクチャールーム（約80名収容可能）、eラーニング室、センター共同研究室等で行われ、遠隔講義やプレゼンテーションを行う機器も充実したものになりました。

授業以外の時間には、院生自習室で、自主的な研究や模擬授業・教材開発等に取り組んだり、院生協働学習室で毎日開かれるゼミや学習会で、切磋琢磨する大学院生の姿が見られます。

2つの学習室からは、学部新卒学生が現職教員学生から学校現場の話を聞く声が聞こえてきたかと思えば、今度は現職教員学生が、学部新卒学生からコンピュータ操作について教わる声が聞こえてきます。人生経験値の違う両者ですが、同じ志を持つ者として関わり合い、教育や学校について真剣に語り合う、このような院生同士の学び合いを、本学教職大学院は一番大切にしています。

教職大学院のカリキュラムの特徴 ～学校現場における実践と理論の往還～

三重大学教職大学院（正式名は「三重大学大学院教育学研究科教職実践高度化専攻」）は、将来の三重県の教育課題に取り組み、学校を変える推進者となるスクールリーダーや実践的な指導力・展開力を備えたミドルリーダーの育成を目指して設置されました。現職教員を対象とする「学校経営力開発コース」と学部新卒学生等のための「教育実践力開発コース」の2つのコースを設置しています。

授業には、「現代カリキュラム論」のほか9科目の共通科目と、「授業研究としての教師のライフヒストリー研究」のほか9科目の選択科目があります。また、中核（コア）科目として、「地域の教育課題解決演習」、「課題発見・解決実習」（長期実習）があり、毎週木曜日午後に、院生全員が履修する「地域の教育課題解決演習」では、県内の教育課題や地域の特色を活かした実践等について学び、その学びを、「課題発見・解決実習」（長期実習）や個人の学修成果報告につなげています。全ての授業において、授業担当教員による一斉指導は少なく、プレゼンテーションや模擬授業、課題解決演習等を多く取り入れ、学校現場における実践と理論の往還ができる内容や方法になるよう、授業改善に努めています。

「経験豊かな現職教員を含む院生が、なぜ、また実習に行くの？」という声がよく聞かれますが、教育の現場において、学校を支えるスクールリーダーやミドルリーダーになるためには、幅広い経験や知識が必要です。そのため、教職大学院では、長期間の実習を実施しています。この実習は、学部での教育実習と区別するため、「長期実習」と呼んでいます。長期実習には、「東紀州実習」、「連携協力校実習」、「附属学校園実習（教育実践力開発コースのみ）」、「現任校実習（学校経営力開発コースのみ）」の4つの実習があり、他校種の学校での実習、専門以外の教科の授業や学級・学校経営について、さらに多くのことを学ぶ機会となります。

特に、三重県南部地域にある熊野市、尾鷲市、南牟婁郡御浜町の学校においての東紀州実習は、本学地域拠点サテライトの一つである東紀州サテライト東紀州教育学舎を拠点に行われ、大きな特徴だと言えます。

2020年7月、新型コロナウイルス禍の中も学びは続いています。東紀州教育学舎では、9月に行われる「東紀州実習」に参加する院生対象に、東紀州の特色ある教育実践や複式学級指導などの事前指導や共通科目である「専門職（プロフェッショナル）としての教師論」「授業デザインと学習指導」「スクールマネジメントの理論と実践」などが、オンライン授業で行われました。

2021年4月に向けた 大学院改組 ～新しい教職大学院へ～

2021年から、本学大学院教育科学専攻（修士課程）と統合し、新しい教職大学院（教育学研究科教職実践高度化専攻）がスタートすることになりました。

この専攻には「学校経営力開発コース」「教育実践力開発コース」の2コースがあり、新たな分野が新設されます。これまで「学校経営力開発コース」のみであった現職教員の進学可能な分野が広がり、より多様な教育人材の育成の場となることが期待されます。現職教員と学部新卒者等がともに学ぶ環境が強化されることにより、互いが良い刺激を与え合う関係性の構築を促進することでしょう。

これからも、本学教職大学院は、「自らの指導力を高め、意欲的な指導を実践できる教員の育成」に取り組み、「社会の未来を育む豊かな教育現場」を実現します。

三重大学沿革

大学の歴史

1874 明治7年

- 明治7年8月　度会県師範学校
- 明治8年7月　三重県師範有造学校
- 明治9年9月　三重県山田師範学校
- 明治9年9月　三重県津師範学校
- 明治10年1月　三重県師範学校
- 明治20年3月　三重県尋常師範学校
- 明治31年4月　三重県師範学校
- 明治37年4月　三重県女子師範学校
- 大正10年12月　三重高等農林学校
- 大正14年2月　三重県立農業補習学校教員養成所
- 昭和2年12月　三重県立実業教員養成所
- 昭和10年4月　三重県立青年学校教員養成所
- 昭和13年4月　三重県立女子青年学校教員養成所
- 昭和18年4月　三重師範学校
- 昭和19年4月　三重青年師範学校
- 昭和19年4月　三重農林専門学校
- 昭和18年12月　三重県立医学専門学校
- 昭和22年6月　三重県立医科大学
- 昭和25年3月　三重県立大学

三重県師範学校正門

津藤堂藩藩校
有造館入徳門

崇廣堂（有造館の支校）

三重高等農林学校

1949 昭和24年 新制大学期

- 昭和24年5月　三重大学（学芸学部、農学部）設置
- 昭和44年4月　工学部設置
- 〃　学芸学部を教育学部に名称変更
- 昭和41年4月　大学院農学研究科修士課程設置
- 昭和47年5月　医学部・水産学部設置（三重県立大学から移管）
- 昭和50年4月　大学院医学研究科博士課程設置
- 昭和53年4月　大学院工学研究科修士課程設置
- 昭和58年4月　人文学部設置
- 昭和62年10月　生物資源学部設置
- 昭和63年4月　大学院生物資源学研究科修士課程設置
- 平成元年4月　大学院教育学研究科修士課程設置
- 平成3年4月　大学院生物資源学研究科博士課程設置
- 平成4年4月　大学院人文社会科学研究科修士課程設置
- 平成7年4月　大学院工学研究科博士課程設置
- 平成13年4月　大学院医学研究科修士課程設置
- 平成14年4月　大学院医学系研究科に名称変更

三重県立大学

2004 平成16年 国立大学法人期

平成16年4月　国立大学法人三重大学へ移行

- 平成17年4月　大学院医学系研究科を部局化
- 平成18年4月　大学院工学研究科を部局化
- 大学院生物資源学研究科を部局化
- 大学院地域イノベーション学研究科設置
- 平成21年4月　教養教育機構を設置
- 平成26年4月　大学院医学系研究科看護学専攻博士課程設置
- 平成28年4月　地域人材教育開発機構を設置
- 平成28年7月　大学院教育学研究科
- 平成29年4月　教職実践高度化専攻専門職学位課程設置
- 平成30年4月　教養教育院に名称変更

モニュメント「いつつの支えあうかたち」

三翠会館

2020 令和2年

- 令和元年5月　創立70周年を迎える

三重大学 三翠ホール（講堂）

数字で見る三重大学の基礎情報

組織規模

学部・研究科等
5学部　9学科　1課程　6研究科

医学部附属病院（令和元年度）
病床数 685床
入院患者延数 211,641人／一日平均入院患者数 578.3人
外来患者延数 347,855人／一日平均外来患者数 1,449.4人

教職員数

（令和2年5月1日現在）

全体 1,984人
役員 9人
教員 751人
職員 1,224人

学生数

（令和2年5月1日現在）

学部学生 5,960人
大学院学生 1,084人

国際交流

海外大学間協定数 66件（25ヵ国）
海外大学学部間協定数 55件（26ヵ国）
（令和2年4月1日現在）

外国人留学生 204人
（令和2年5月1日現在）
海外留学・派遣学生 394人
（令和元年度）

予算・施設

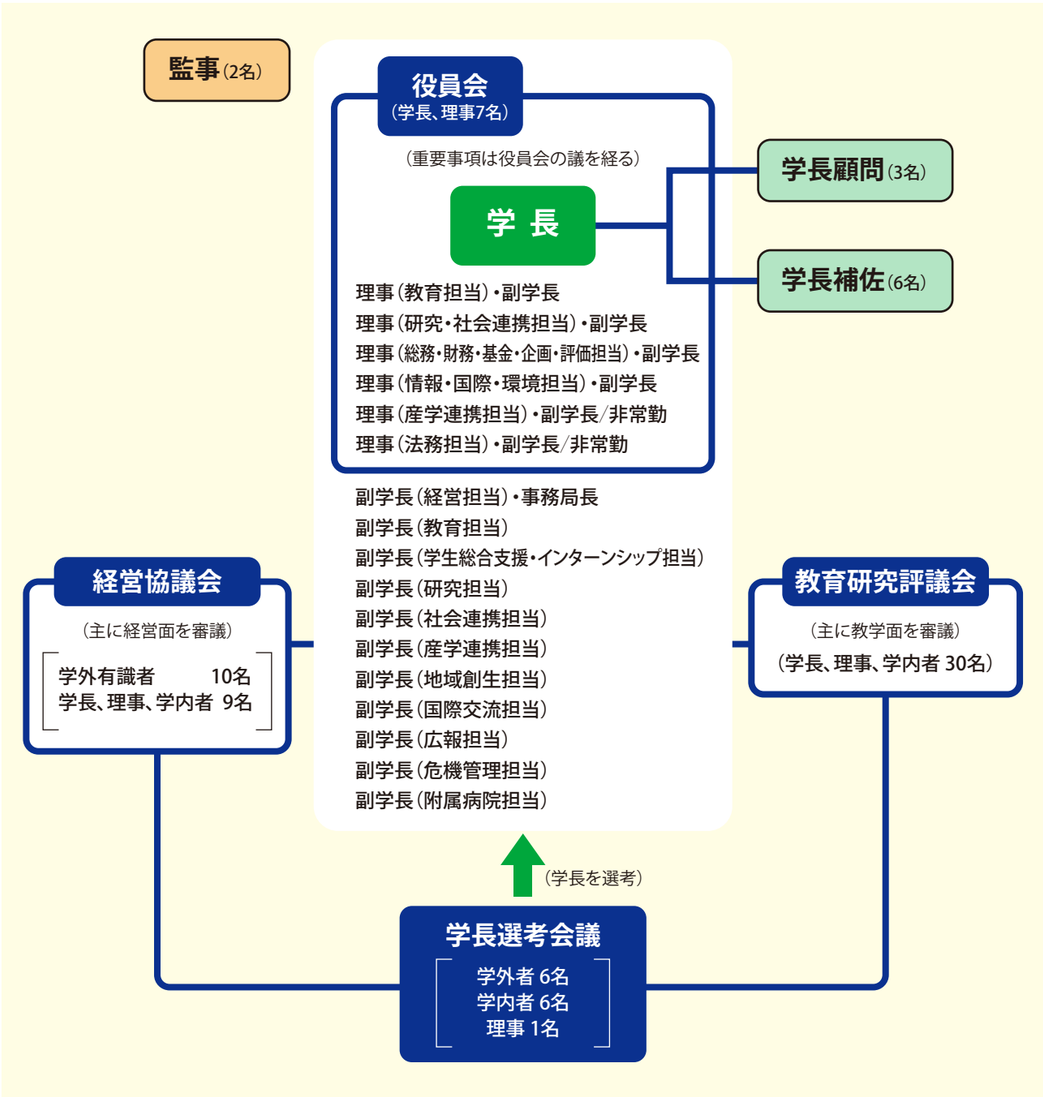
予算規模（令和2年度）
47,812百万円
（収入・支出）

土地面積（令和2年4月1日現在）
5,511,692㎡
（うち借受地92,000㎡）

建物面積（令和2年4月1日現在）
321,057㎡

三重大学の運営体制

運営組織



監事監査

監事は、業務の適正かつ効率的な運営を確保すると共に、会計経理の適正を期することを目的に監査を実施しています。監査の方法は、内部監査部門や会計監査人と連携し、毎年度の監査計画に監査事項を設定して実施するほか、役員会・教育研究評議会・経営協議会やその他重要な会議に出席し、ガバナンス体制や学長及び理事の職務の執行が法令などに適合することを確保するための体制(内部統制システム)について整備・運営状況を確認しています。

2019年度の監査実績

毎年度の定期監査項目

- 役員会、教育研究評議会、経営協議会の運営状況
- 会計処理、財務諸表の作成、決算報告の状況
- 附属病院の運営状況

中期計画における重点項目

- 中小企業との共同研究数倍増目標への取組
- COC+事業推進への取組
- インターンシップの推進への取組
- 地域拠点サテライトの推進状況

内部監査部門との連携では、下記のとおりの監査を実施しております。

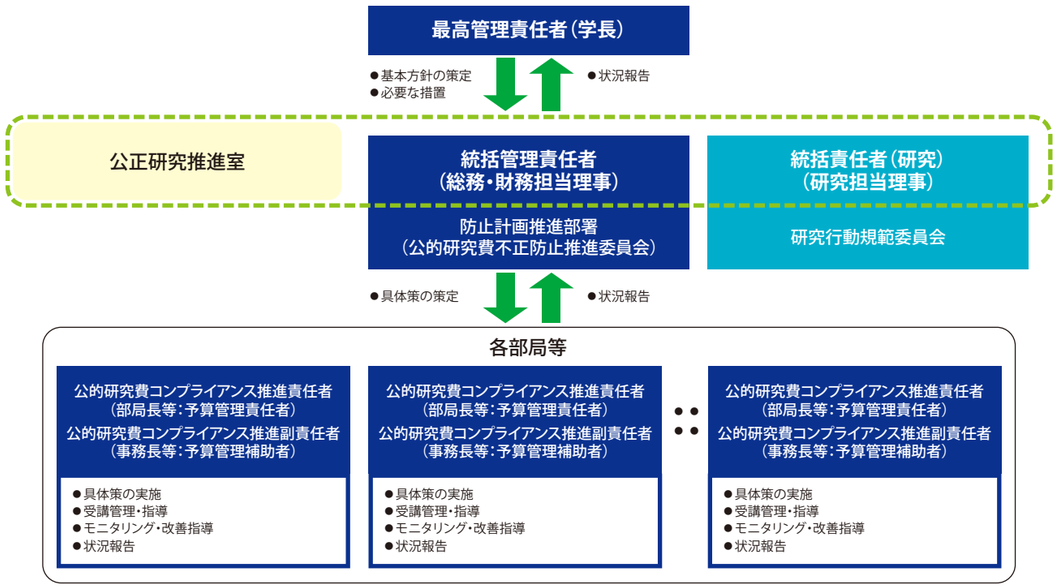
- 公的研究費の執行状況
- 地域人材教育開発機構の活動状況
- 法人文書の管理状況
- 毒物劇物の管理状況

公的研究費の不正防止に関する責任体制

三重大学では、企業等との共同研究費や競争的資金及び運営費交付金から配分される研究費(以下「公的研究費」という。)を適正に運営・管理し、不正使用の発生リスク減少や防止を目的として、学長を最高管理責任者とする体制を構築しています。

公的研究費の不正使用を防止し、適正な管理・監査を行うための「三重大学における公的研究費の管理・監査の基本方針」や関連規程等を定めているほか、教職員に対し不正防止対策の理解や意識を高めるための公的研究費コンプライアンス教育や、「公的研究費不正防止計画」に基づくモニタリング等を実施し、不正使用の防止に努めています。

※関連規程等
三重大学ホームページ(http://www.mie-u.ac.jp/profile/academics/publicsources.html)
大学概要 > 研究活動 > 公的研究費の不正防止について



教 育

「4つの力」を兼ね備え、幅広い教養と高度な専門知識・技術を有する人材を育成

三重大学は、学位授与の方針、教育課程編成・実施の方針、入学者受入れの方針に基づく体系的で、組織的な大学教育を展開し、その成果を学位を与える課程共通の尺度に則って点検・評価を行うことで、教育の改善に取り組んでいます。

学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

本学は、幅広い教養の基盤に立った高度な専門知識や技術を有し、地域のイノベーションを推進できる人材を育成するために、「4つの力」、すなわち「感じる力」、「考える力」、「コミュニケーション力」、「生きる力」を養成します。

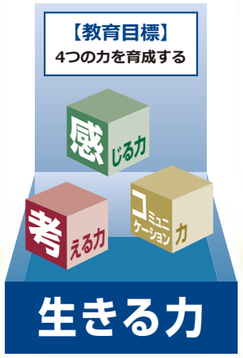
各学部・各研究科は、「4つの力」の養成をその専門性に適合させることによってより詳細な目標を設定し、厳格な成績評価に基づいて学位を授与します。なお、4つの力は、以下の12の要素で構成されます。それぞれの力の到達度を確認するためのルーブリックを作成しています。

■ 感じる力
感性、共感、主体性

■ 考える力
幅広い教養、専門知識・技術、
論理的・批判的思考力

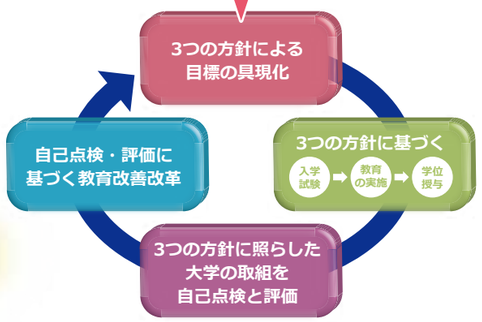
■ コミュニケーション力
表現力（発表・討論・対話）、
リーダーシップ・フォロワーシップ、
実践外国語力

■ 生きる力
問題発見・解決力、
心身の健康に対する意識、
社会人としての態度・倫理観



「4つの力」に関するルーブリック（抜粋）

「4つの力」		観点の説明	レベル1【かなり努力を要する】	レベル2【努力を要する】	レベル3【最低限は満たしている】	レベル4【十分に満たしている】
感じる力	感性	対象世界との出会いを通じて、対象をその多様性において受け止め、それを契機として諸活動にいかすことができる	自分以外の世界について理解しようとしていない。	自分の外の世界との出会いを通じて、その多様性を理解できているが、その理解を元に自らの活動が変わることはない。	対象世界との出会いを通じて、対象をその多様性において受け止め、それを契機として諸活動にいかすことができる。	対象世界との出会いを通じて、対象をその多様性において受け止め、それを契機として諸活動にいかすとともに、常に自らの行動を見直し、行動することができる。
	共感	他者や社会の多様性を受容して行動することができる。	他者や社会の多様性を認め、受容することができない。	他者や社会の多様性を受容することはできるものの、それをふまえた行動をとることができない。	他者や社会の多様性を受容して行動することができる。	他者や社会の多様性を受容しするとともに、他者の立場や心情を配慮しながら行動することができる。



教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）

本学は、ディプロマ・ポリシーを達成するために、教育課程の編成に当たっては、以下の方針にしたがって、必要な授業科目を開設し、体系的に教育課程を編成します。

① 教養教育においては、幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養するよう適切に配慮し、自律的・能動的学修力の育成とグローバル化に対応できる人材の育成を目指して、「教養基盤科目」および「教養統合科目」をおきます。

② 専門教育においては、各学部のディプロマ・ポリシーに基づき学部等の専攻に係る高度な専門性を身につけるために、順次性のある体系的な授業配置を行います。

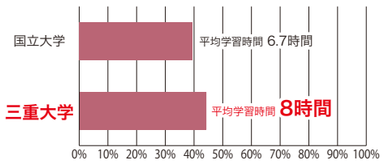
③ 本学の教育目標である「4つの力」、すなわち「感じる力」、「考える力」、「コミュニケーション力」、それらを総合した「生きる力」を身につけるために、PBL等を含む主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）を実現します。

④ 地域課題を解決できる人材の育成を目指して、地域の取組や問題と接する機会を積極的に提供します。

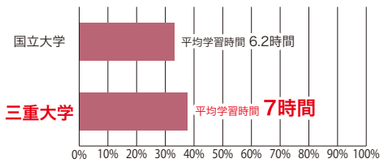
⑤ 登録単位数の上限設定により充分な学習時間を確保し、全ての授業において授業時間外の学習を促すとともに、明確で客観的な評価基準に基づく厳格な成績評価を行います。

⑥ 全学的な学生調査の実施により、ディプロマ・ポリシーに掲げる能力を学生が身につけているかを検証します。

予習・復習・課題など授業に関する学習を1週間に6時間以上行う学生の割合



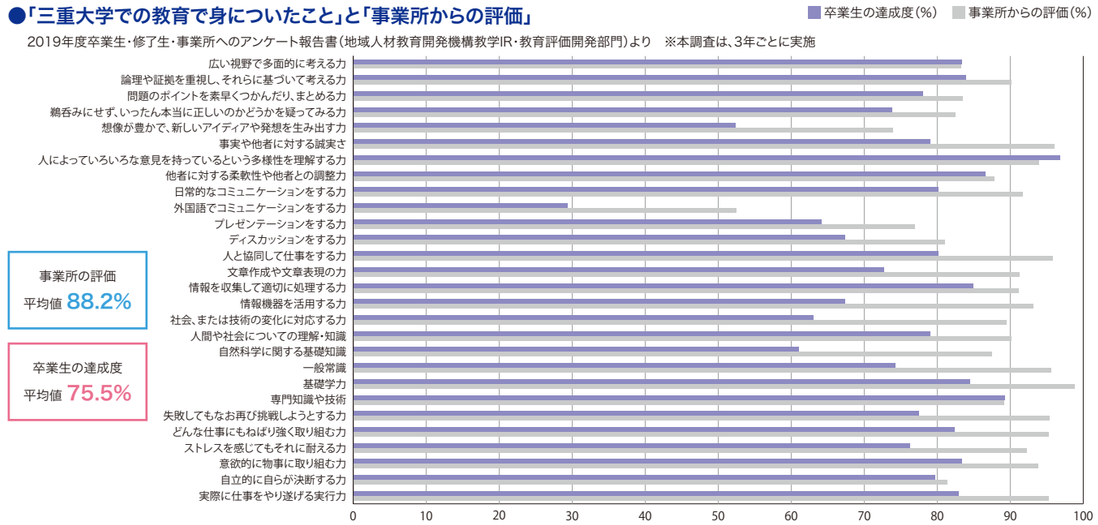
授業以外の学習を1週間に6時間以上行う学生の割合



文部科学省「全国学生調査」の結果 2019年11月25日から12月20まで
対象：学部3年生、修業年限が6年の学部は4年生が対象

●「三重大学での教育で身についたこと」と「事業所からの評価」

2019年度卒業生・修了生・事業所へのアンケート報告書（地域人材教育開発機構教学IR・教育評価開発部門）より　※本調査は、3年ごとに実施



入学者受入れの方針（アドミッション・ポリシー）

本学は、本学の一員となって学び続ける意欲を持つ、次のような学生を求めます。

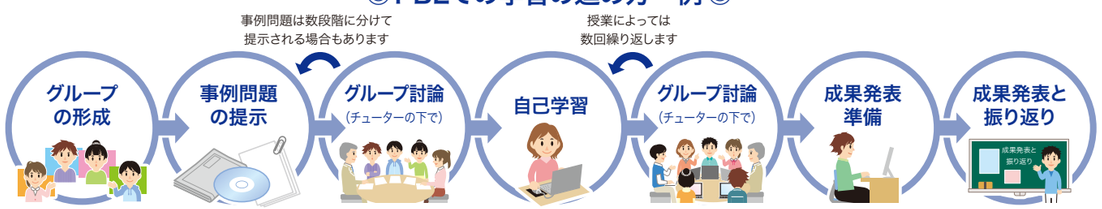
●入学後の修学に必要な基礎的知識と技能を有している（知識・理解）
●ものごとを多様な視点から捉え、論理的に考えることができる（思考・判断）
●自分の考えを的確に表現し、伝えることができる（技能・表現）
●人や自然に対して関心を持ち、社会に貢献したいという意欲を有している（関心・意欲）
●他の人と相互理解を図り協力して、新しい課題に積極的に挑戦しようとする態度を有している（態度）

上記の方針に基づき、学士課程においては学部ごとに、また大学院課程においては研究科ごとに、適切な選抜方法を定め、実施します。

生きた力を育てるPBL教育　Problem／Project based Learning

PBLとは、現実的な問題解決やプロジェクト達成を通して学びを深める、世界でも今、注目されている学習法です。本学では、全国に先がけて全学的に導入されています。

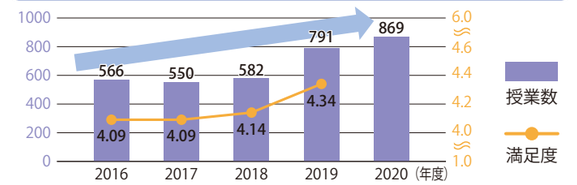
◎PBLでの学習の進め方一例◎



PBLでの学びの成果は、教室内にとどまらず、現実問題の解決や、ものづくり、地域貢献活動の実現など、大きく広がることもあります。

本学では、PBLを取り入れた授業が年々増加しています。そして、PBLを含む、アクティブラーニング型授業の学生からの満足度についても好評を得ています。

PBL型授業開講数とアクティブラーニング型授業（PBLを含む）の満足度



※PBL授業数は授業シラバスにおいてPBLを取り入れていることが明示されている授業をカウントしたものです。
※満足度は1～6の6段階評定で、最高点が6点です。また2020年度の満足度については2021年年初に行われる満足度調査にて調査される予定です。

グローバル社会で自ら学び続ける人材を育てる教養教育

三重大学の教養教育は、全学部の学生が共通で履修する「共通カリキュラム」と各学部の理念に従って履修する「目的別カリキュラム」の大きな2つのカリキュラムで、成り立っています。専門教育の前にあるいは専門教育と並行して、これらを受講することにより、幅広い教養の基盤に立った高度な専門知識や技術を有し、社会に積極的に貢献できる人材を育成します。共通カリキュラムは、次の2つの理念に基づいています。

「自律的・能動的学修力の育成」

「グローバル化に対応できる人材の育成」

共通カリキュラムの具体的な内容は次のようになっています。

自律的・能動的学修力の育成
社会がどのように変動しても自ら学び続け、不測の事態にも対応できる力を養います。

グローバル化に対応できる人材の育成
単に英語ができるだけではなく、世界的視野をもち、個別の文化も尊重できる人材を育成します。

教養教育　**共通カリキュラム**　**目的別カリキュラム：基礎教育、キャリア教育など**

教養基盤科目

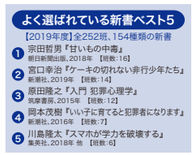
アクティブ・ラーニング

●スタートアップPBLセミナー

1年次前期の必修科目である「スタートアップPBLセミナー」では、グループでの協同学修により、研究プロジェクトに取り組むことに重きを置いています。2020年度からは、国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に記載されている持続可能な目標（SDGs）に関連した研究プロジェクトに取り組みます。

●教養セミナー

1年次後期の必修科目である「教養セミナー」では、「読む」「書く」能力の育成のため、書籍を読み、自分なりに要約を書き、最終的には、書評としてまとめます。書いたものは、学生同士で批評し合い、さらに良いものに仕上げます。優れた書評は、毎年『優秀書評集』に掲載されます。



外国語教育

●英語（前期集中型カリキュラム）

入学後集中して英語を学びます。全員が入学時と前期終了時TOEIC IPテストを受験し、自分の英語力を自覚します。

●英語特別プログラム

TOEIC IPテストの成績優秀者のためのプログラムで、アクティブ・ラーニングや教養統合科目の一部も英語で受講します。春休みにはイギリスのシェフィールド大学で実施する海外研修に参加できます。

4日間の集中講義

異文化理解

多様な文化を理解するグローバル人材育成のための科目です。ドイツ語、フランス語、中国語、朝鮮語、ロシア語、スペイン語、ポルトガル語のいずれかの言語を手段として、その言語が使用される文化圏の文化、歴史、生活等を理解する科目を履修します。

健康科学

体育の実技と健康科学等の講義を組み合わせた新たな授業により、健康的な生活ができる自己管理能力を育成します。

キャリア教育

キャリア教育について独自の方針（三重大学キャリア教育方針）を定めており、学生のキャリア発達を促す科目が多数あります。教養基盤科目の「キャリア教育」領域のほか、教養統合科目の中にあるキャリア教育関連の科目を履修することで、学生が自らの社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育むことを目指しています。

教養統合科目

地域理解・日本理解

バランスのとれた国際人となるよう、地域を理解し、それを地域において活用することを目指す科目、日本を理解する科目を履修します。

国際理解・現代社会理解

今後の複雑な国際社会に対応できる人材を育成するため、東西の歴史や思想、政治・経済・社会のしくみ、現代の国際情勢などを学ぶ科目を履修します。

現代科学理解

国際社会を理解するために必要な情報科学、環境とエネルギー、生命科学などさまざまな科学的問題の基本的知識とそれらについて合理的・科学的に考える力を育成する科目を履修します。

グローバル化に対応できる人材を育てる ー英語特別プログラムー

2015年度に新しい教養教育カリキュラムが始まり、グローバル化に対応できる人材を育てるために、「英語特別プログラム」を設置しました。

本プログラムは、入学時のTOEIC試験で高得点を取得した1年次の学生を対象としています。英語の授業の他にグループワークを取り入れたアクティブ・ラーニング科目や英語による講義科目を履修し、夏休みには、イギリス・シェフィールド大学から講師を招いた集中講義や合宿研修、春休みには、シェフィールド大学での短期海外研修に参加できる1年間のプログラムとなっています。

イギリス・シェフィールド大学

初年度となった2015年度は、プログラム所定の単位を修得した学生が62名、そのうち51名が短期海外研修に参加しました。その後、年々、単位修得者および研修参加者は増加し、2019年度は、92名が単位修得し、73名が研修に参加しました。

英語特別プログラムの年間スケジュール

1年次 前期
英語科目（選択の中級科目を含む） ／ アクティブ・ラーニング科目【英語による】 ／ 講義科目【英語による】

1年次 夏休み
シェフィールド大学からの講師による4日間集中講義と1泊2日の合宿研修

合宿研修

1年次 後期
英語科目（選択の中級科目を含む） ／ アクティブ・ラーニング科目【英語による】 ／ 講義科目【英語による】

1年次 春休み
シェフィールド大学での研修（3週間）＊
＊参加希望者多数の場合には選抜を行っています。

シェフィールド大学での研修

英語による講義

イギリスでの研修

「2018年度三重大学教養教育英語特別プログラム」報告会及び修了式

過去3年
（2017年度～2019年度）
英語特別プログラム
満足度 86%

このプログラムの特徴は、体系的なカリキュラムに組み込まれた研修であることです。

三重大学での授業に加え、シェフィールド大学教員による集中講義や合宿研修を経ることにより、3週間という短い期間ではありますが、効果的な海外研修が実現しています。また、学生は、シェフィールド大学と連携するホームステイ団体斡旋により、イギリス人の家庭にホームステイします。本学の教員が引率し現地でのサポートを行うので、学生は安心して参加できます。

学期中には、ランチをとりながら英語を使って交流を行う「イングリッシュラウンジ」を開設し、英語学習をサポートしています。

2019年度の研修では、帰国時に、新型コロナウイルス感染症が世界各国で急激に広がり始めましたが、シェフィールド大学やホームステイ家族の協力のもと、学生73名と引率教員2名全員が、大きな成果を携えて無事帰国することができました。

この外国語教育は、今後、専門教育へと舞台を移し、世界で活躍できる人材育成へと、さらなる進化を続けていきます。

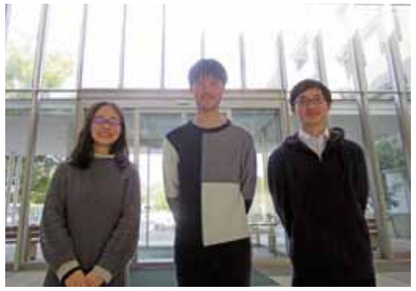
英語特別プログラム
⬇ 短期海外研修ブログ

院長だより
⬇ 院長、前機構長のブログ

三重創生ファンタジスタ
文部科学省 地(知)の拠点
HPはこちらから

「三重創生ファンタジスタ」が誕生しました

三重創生ファンタジスタ資格第1期生　エキスパート資格1名、アドヴァンス資格362名の輩出


エキスパート資格取得者（見込者も含む）のみなさん（真ん中、エキスパート資格を取得し卒業した岡本守永さん）

三重大学では、2019年度、本資格第１期生となる362名の学生がアドヴァンス資格を取得しました。食と観光分野200名、次世代産業分野117名、医療・健康・福祉分野51名（2つの分野の資格取得学生が6名のため、取得学生数は延べ368名）、また1名の学生が必要単位数の修得のほかに地域活動・実績を評価されたものだけが取得できるエキスパート資格を取得しました。

三重県は、全国2位の経済成長率（※）を誇り、特に製造業を中心とした生産力の向上や周辺産業の創出に対して、若い優秀な人材が求められています。伊勢湾に育まれた海の幸や南北に長い地勢から生まれる山の幸、日本人の心の拠り所である伊勢神宮や世界遺産・熊野古道、自動車産業の夢の舞台である鈴鹿サーキットやMRJに代表される航空宇宙産業など、数多くの地域資源をいかにして産業に結び付けるかの地域イノベーションが期待されています。（※2009～2018 県民経済計算より）

文部科学省「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」（2015年度～2019年度）における三重県での取組みでは、三重県内の全高等教育機関（四年制大学、短期大学、高等専門学校）と県内企業、自治体が協力して、これらの地域イノベーションに貢献する人材「三重創生ファンタジスタ」を養成してきました。

COC+事業は終了しましたが、2020年度からは「高等教育コンソーシアムみえ」の取組として「三重創生ファンタジスタ」を養成していきます。

三重創生ファンタジスタ資格とは

「三重創生ファンタジスタ」資格にはベーシック、アドヴァンス、エキスパートの3つのクラスがあります。資格を目指す学生は、段階的にステップアップし、地域に貢献するための知識や行動力が養われます。これらの教育プログラムのさまざまな科目で、三重を学び、重要施策である3つの分野の課題に取り組む意欲の高い学生を養成しています。

2020年3月現在、「ベーシック資格」の教育プログラムを構築している県内高等教育機関は11校、「アドヴァンス資格」は5校、「エキスパート資格」は5校で、本学では、「エキスパート」、「アドヴァンス」の2つの資格取得が可能です。エキスパート資格は、対象科目12単位で取得できるアドヴァンス資格の上位資格にあたり、顕著な地域活動・実績、主体的な地域貢献やボランティア、インターンシップ、サークル活動等の実績を持ち、他の学生や後輩たちの模範となる者を選考しています。上記写真の三重創生ファンタジスタエキスパート資格取得者2名は、2021年3月の卒業時に三重創生ファンタジスタエキスパート資格を取得することになります。

（三重創生ファンタジスタ資格認定副専攻コースイメージ）

また、本学における三重創生ファンタジスタ有資格者やＣＯＣ+の授業・イベント参加者と資格未取得者の県内就職率の比較を行ったところ、有資格者やＣＯＣ+の授業・イベント参加者の方が県内就職率が高いことがわかりました。

事業協働機関をはじめとした県内企業からも、「有資格学生は、非常に優秀で地域に貢献する意欲が高く、この資格や県内で行った地域活動について自信を持ってアピールしてくれたので内定を出しました。」という嬉しい声もお聞きしています。

開設授業科目〈2019年度〉（COC+オリジナル授業）

地域志向科目群

三重の歴史と文化（前期 全15回）

三重の豊かな歴史、文化、先人の功績、観光展開について学ぶ。

学生の感想（一部抜粋）
●伊勢は江戸や京都から離れていて、どちらかといえば田舎に分類されるが、伊勢参りで人の行き来があったので情報は多く入ってきた。これが学問にじっくり取り組める環境を作ったというのはとても興味深かった。

地域のゲストスピーカーを招いた講義の様子

三重の産業（後期 全15回）

三重の産業の歴史的発展や現状、課題を学術と実務の両面から学ぶ。

学生の感想（一部抜粋）
●グループワークを通して他の履修生とも交流でき、まったく知らない他分野について学べてとても面白い。

地域のゲストスピーカーを招いた講義の様子

地域実践交流科目群

食と観光実践

地域をフィールドとし、「食と観光」を切り口に、課題発見と解決方法を、グループワークを通じて学ぶ。

学生の感想（一部抜粋）
●他の班が入手していないような漁師さんの本音や、私たちが間違った固定概念を持っていることなどを知ることができ、とても貴重な意見を知ることができた。

現地学習の様子

次世代産業実践

製造現場や研究機関に足を運び、最先端技術を社会実装する働き方について社会人の方々と意見交換しながら学ぶ。

学生の感想（一部抜粋）
●グループワークを通じて、自分の意見を持つためには正しい知識と経験をもっと身につけなければならないと感じた。

現地学習の様子

医療・健康・福祉実践

三重県の過疎地域における医療・健康・福祉の現状を知り、課題抽出と解決策を提案する。

学生の感想（一部抜粋）
●普通には絶対に体験できない事ができた。
●知らない三重県の魅力がまだまだたくさんあると気づけた。

現地学習の様子

自然環境リテラシー学

自然環境を体系的に理解するとともに、海や山での体験を通じて安全管理や技能を修得する。
自然環境リテラシー学は、県内の自然を多くの人に体験してもらう「三重まるごと自然体験構想」の一環として、自然を体験できるプログラムの開発や魅力を伝える人材の養成を目的に、県と協働で開設している。

現地学習の様子

地域発見型インターン

「体験型」インターンシップを通して、県内企業の実態を理解し、それについて深い分析・考察を加え、自らの考えを社会に還元する素養を身につける。

学生の感想（一部抜粋）
●企業で学んだことを自分なりにまとめて後日発表したことで、ただ学んで終わりではなく、復習を行なったことで重要なところはどんなところなのかを理解できたと思う。

現地学習の様子

地域イノベーション学科目群

三重の地場産業

地場産業への理解を深め、各産業が抱える課題の発見と、実現可能な解決策を提案する能力を身につける。

学生の感想（一部抜粋）
●座学で聞いた課題と現場で知った課題にとてもギャップがあり驚いた。
●楽しく学ぶことができた。このような授業がもっと増えてほしい。

現地学習の様子

三重創生ファンタジスタクラブ（MSFC：Mie Sousei Fantasista Club）の活躍

2017年４月に組織され20名からスタートした三重創生ファンタジスタクラブ（MSFC）には、2020年４月現在35名の学生が所属しています。地域からの要望で開始したプロジェクトや学生が自分たちで企画を作り地域の問題解決に挑むプロジェクト、地域活動に取り組むクラブや他の高等教育機関の学生との交流・連携など活動の広がりをみせています。

寺院での子供向けイベント（小学生対象）

県内企業の宣伝ポスター制作プロジェクト

県内山間部への移住者呼び込みイベント

古民家再生プロジェクト

いちごの新商品開発プロジェクト

高校生向けセミナー　アシスタント

この活動は、学生の成長につながるか？「三重創生ファンタジスタ成長アンケート」

ＭＳＦＣに所属する学生（1年生を中心）を対象に、クラブでの地域活動が自身の成長にどのように結びついているかを把握するため、「三重創生ファンタジスタ成長アンケート」を実施しました。本アンケートは、クラブ活動を通じて成長するであろう13項目を自己採点で回答するものとなっています。活動の影響を測定するために、活動が本格化しはじめる前の7月と、地域活動をある程度体験した1月に実施しました。

【行動力】
1. 何をしたらいいか分からず、行動できない
2. 周りからの指示があれば、行動できる
3. 周りからの指示がなくても行動できるが、目標を意識していないことが多い
4. 自分で判断して行動できるが、目標を達成できないことがある
5. 自分で判断して行動し、目標を達成することが出来る

【責任感】
1. 自分の役割が分からず、何をしていいかわからない
2. 自分の役割を把握しているが、完全に果たすのが難しい
3. 自分の役割を把握して、自分の役割を果たすために努力している
4. 自分の役割を把握し、役割を果たしている
5. 自分の役割の範囲だけでなく、全体を把握して自分の役割を拡張することが出来る

【活動への取り組み姿勢】
1. 周りが何をしているのか分からず、後ろで見ているだけのことが多い
2. 周りが何をしているのかわからないまま、機械的に言われたことをやっている
3. 活動の目的を理解しているが、特にやりがいは感じない
4. 活動の目的を理解して、日々の活動を楽しんでいる
5. 活動の目的を理解して、やりがいや自己肯定感を感じながら活動している

【三重県への関心度】
1. 三重に興味関心がなく、三重のことを知ろうと思わない
2. 三重に興味関心はあるが、三重のことを説明できない
3. 三重に興味関心があり、三重のことを説明することが出来る
4. 三重に高い興味関心があり、三重のことを実体験をもとに説明することが出来る
5. 三重に高い興味関心があり、自ら三重の魅力を発見し、その魅力を発信したり新たな価値を生み出すことが出来る

【前向き力】
1. つらい状況になった時に、くよくよ考えてしまい、気持ちの切り替えがなかなかできない
2. つらい状況になった時、気持ちの切り替えをできることがある
3. つらい状況になった時、気持ちの切り替えをできる
4. つらい状況になっても、前向きに行動できる
5. どんな状況になっても、常に前向きに行動し、周りの空気も変えることが出来る

【論理的思考力】
1. 考えることができない、もしくは一つ一つの情報も理解できない
2. 各々の情報は理解できるが、その関係性はわからない
3. 各々の情報を理解できるし、その関連性も理解できる
4. 関連性を理解した上で、全体の中で自分がどの役割なのか理解できる
5. 手元にある情報はすべて理解し、自分で関連性を整理し、活用することが出来る

【洞察力】
1. 与えられた課題そのものがわからない
2. 目の前の仕事に対しては取組むことが出来る
3. 自分のチームの企画の流れを理解し、実行に移すことが出来る
4. 活動全体の流れを捉えることができ、優先順位をつけて実行に移すことが出来る
5. 物事を実行するにあたり、不測の事態も考慮し、対処法や予防法を考えることが出来る

【コミュニケーション力】
1. 相手の考えていることが理解できない、自分の考えていることも言葉にできない
2. 相手の考えは理解できるが、自分の考えを理解してもらうことができない
3. 相手の考えも理解でき、自分の考えも理解してもらうことができる
4. 背景を含め、相互理解を深めて、より有益な関連情報を交換し合える
5. 背景を含め、相互理解を深めて、より有益な関連情報を交換し合ったうえで、協力を得ながら物事を進めることができる

【協力を得る力】
1. 誰にも相談できず、自分で抱え込んでしまう
2. 誰にも相談できず、自分で解決しようとする
3. 誰かに相談し、アドバイスを受け取ることが出来る
4. 誰かに相談し、解決に向けて協力を得ることが出来る
5. 解決のために周りの人が同じ目標に向かって行動してくれる

【伝える力】
1. 伝えたいことがわからない
2. 伝えたいことはあるが、うまくまとまらず、言葉にできない
3. 伝えたいことを言葉にすることはできる
4. 自分の意見をわかりやすく他人に説明することができる
5. 自分の意見をわかりやすく他人に説明することができ、かつ共感や協力を得ることができる

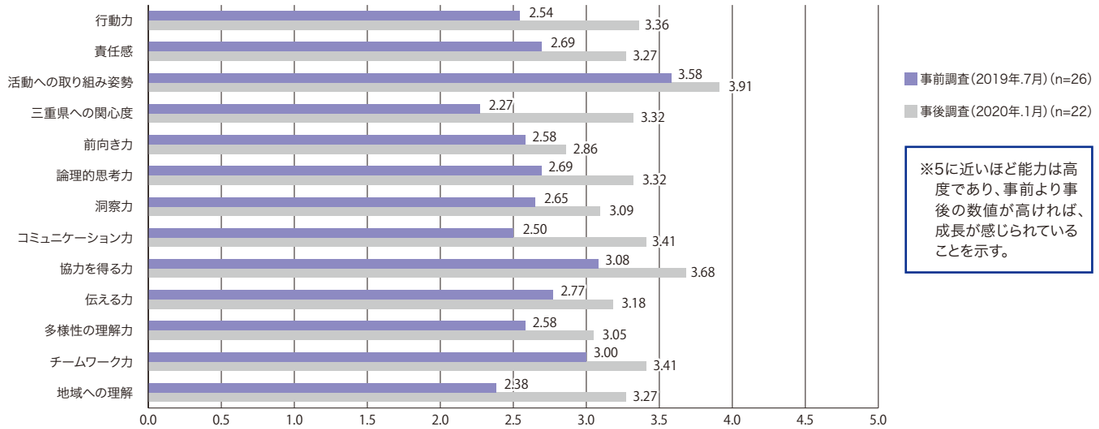
【多様性の理解力】
1. MSFC、産学官、地域の関係者の考えや立場に関心がない
2. MSFC、産学官、地域の関係者の考えや立場に関心はあるが、理解できていない
3. MSFC、産学官、地域の関係者の考えや立場に関心があり、理解できているが、行動までつながらない
4. MSFC、産学官、地域の関係者に理解を示し、行動できる
5. MSFC、産学官、地域の関係者の考えやニーズ、強みなどを把握し、新たな価値を創造することが出来る

【チームワーク力】
1. チームメンバーの人の考えを理解することができず、一緒に行動することができない
2. チームの一員として動くことが出来る
3. 自分の役割を自覚して、チームの一員として動くことが出来る
4. チームメンバーとして動くことができ、メンバーの良さを引き出すことが出来る
5. チームメンバーの良さを引き出し、お互いの足りない部分を補うことが出来る

【地域への理解】
1. 地域のニーズ、課題を理解できない
2. 地域のニーズ、課題を理解できる
3. 地域の課題解決に加わることが出来る
4. 地域の方々と力を合わせて課題解決にむけて行動できる
5. 地域課題の解決案を自ら提示し、地域の方々と力を合わせて課題解決にむけて行動できる

回答はアンケート時の状況に当てはまるものを選択させ、質問毎に任意で理由を入力できる欄を設けた。

その結果、1年生の事前アンケート（7月）と事後アンケート（1月）を比較すると、すべての項目において、ポイントが上昇しており、特に、「三重県への関心度」、「コミュニケーション力」、「地域への理解」が大幅に伸びていました。ほとんどの1年生は、地域活動が未経験でしたが、ＭＳＦＣにおいて地域の方々と協働することで、三重県への関心や理解だけでなく、社会で必要とされる能力などを身に着けてきたと感じていることがわかりました。また、「活動への取り組み姿勢」のポイントは、とても高く、MSFCに入部する学生は、もともと意欲のある学生が多いことがうかがえました。

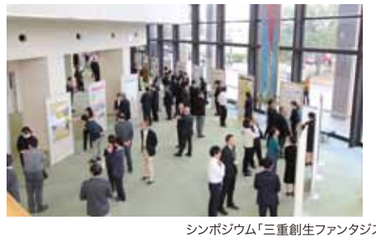


「三重創生ファンタジスタ成長アンケート」

COC+シンポジウム「三重創生ファンタジスタ養成事業の総括と展望」を開催しました

2019年11月23日（土）、COC+事業の集大成となるシンポジウム「三重創生ファンタジスタ養成事業の総括と展望」を開催しました。当日は秋晴れに恵まれ、153名の大学関係者、学生、企業関係者が参加しました。第一部「三重大学COC＋5年間の歩み～オール三重体制による三重創生ファンタジスタの養成～」では、冨樫副学長（教育・COC＋担当）から、これまで取り組んできた教育プログラムの成果と課題について報告がありました。第二部「パネルディスカッション　三重創生ファンタジスタ　これまでとこれから」では、COC＋事業の関係者が、ファンタジスタの養成を継続していくことの重要性、卒業後のフォローをサポートできないかなどの意見交換を行いました。

第三部「事例発表学生が地域から学んだこと」および学生によるポスターセッションでは、本学のほか、四日市大学、皇學館大学、鳥羽商船高等専門学校の学生が、自分たちの学びやミッション、ポスターを発表しました。学生からは、今後もこのように、自分たちの活動を発表できる機会が欲しいなど意欲的な感想がありました。詳細は下記の2019年度事業報告書をご覧ください。



シンポジウム「三重創生ファンタジスタ養成事業の総括と展望」

⬅事業報告書はこちらから

研 究

多様で独創的な研究を充実させ、社会に成果を還元

三重大学は、多様な独創的応用研究と基礎研究の充実を図り、さらに固有の領域を伝承・発展させると共に、総合科学や新しい萌芽的・国際的研究課題に鋭意取り組み、研究成果を社会に積極的に還元します。

地域の課題を探求するならば、それが狭い研究分野の枠に収まり切るなどということは決してなく、本学の研究が産業へ、経済へ、社会へと通じ、また自然へ、歴史へ、文化へと連なっていく。これこそが、私たちの本当の未来の姿を描き出す研究の動機であり契機となります。

本学は、各種学問の横断的総合体として、地域との強い絆を持ち続けます。

研究に関する目標

1. 研究水準及び研究の成果
   研究者の自由な発想に基づく基礎研究を発展させ、それぞれの学術分野や学際領域における特色ある研究を推進し、本学を代表する領域においては、世界水準の研究を推進する。
2. 研究成果の教育への反映及び社会への還元
   研究成果を教育に反映させ、社会に還元するために、地域自治体や産業界との産学官連携活動等を推進する。

研究による地域イノベーションの推進

1. リサーチセンターについて

近年、大学を取り巻く環境が大きく変わってきており、大学の教育・研究も、今までの狭い専門領域にとらわれず、学際的、総合的な視点から、複雑化、多様化する現代社会に柔軟に対応し、創造的、国際的な視野をもった研究が必要となってきています。また、科学技術の分野でもその発展はめざましいものがあり、新しい技術を創生するためには、異分野の先端技術を複合的に組み合わせながら、新たな理論的、実践的な研究体系の構築が不可欠となっています。

本学では2008年度より、分野横断的な最先端研究等を推進し、又は特定分野の独創的研究等を推進すると認められる研究者グループをリサーチセンターと認定しています。

●リサーチセンター

2020年4月1日現在

番号	センターの名称	代表者名		
1	三重大学環境エネルギー工学研究センター	工学研究科	教　授	廣田　真史
2	三重大学地域ECOシステム研究センター	地域イノベーション学研究科	教　授	矢野　竹男
3	三重大学メディカルゼブラフィッシュ研究センター	医学系研究科	教　授	丸山　一男
4	三重大学脳解析センター	医学系研究科	教　授	成田　正明
5	三重大学マトリックスバイオロジー研究センター	医学系研究科	准教授	今中　恭子
6	三重大学ソフトマターの化学リサーチセンター	工学研究科	教　授	鳥飼　直也
7	三重大学次世代ICTリサーチセンター	工学研究科	教　授	成瀬　央
8	三重大学バイオエンジニアリング国際教育研究センター	医学系研究科	教　授	島岡　要
9	三重大学環境低負荷プロセスリサーチセンター	工学研究科	教　授	金子　聡
10	三重大学複合的がん免疫療法センター	医学系研究科	准教授	宮原　慶裕
11	三重大学難病研究センター	医学系研究科	教　授	ガバザ　エステバン
12	三重大学海藻バイオリファイナリー研究センター	生物資源学研究科	准教授	柴田　敏行
13	三重大学先天性心疾患・川崎病センター	医学部附属病院	准教授	三谷　義英
14	三重大学スマートセルイノベーション研究センター	生物資源学研究科	教　授	田丸　浩
15	三重大学初等教育におけるドローンの教育利用研究センター	教育学部	教　授	荻原　彰
16	三重大学先端医科学グローカルリサーチセンター	医学系研究科	教　授	稲垣　昌樹

このリサーチセンター制度における活動成果の向上を目指し、本学として重点的に研究に取り組むものを新たに「卓越型リサーチセンター」として6センター（工学系3、医学系2、生物資源学系1）を2017年度に設置しました。「卓越型リサーチセンター」は大学から資金の提供や研究スペースの貸与を実施してその研究を支援しています。

2019年度には、設置された6つの「卓越型リサーチセンター」について、内部評価及び外部有識者による外部評価を実施しました。評価結果はいずれのセンターも高い評価を得るとともに、継続認定を決定しました。今後は、各センターが更なる特色ある先端的な研究成果を得ることができる研究組織に発展・展開していくことを目指し、支援を継続していきます。

●卓越型リサーチセンター

2020年4月1日現在

番号	センターの名称	代表者名		
1	三重大学次世代型電池開発センター	工学研究科	教　授	今西　誠之
2	三重大学人間共生ロボティクス・メカトロニクスリサーチセンター	工学研究科	教　授	池浦　良淳
3	三重大学特異構造の結晶科学リサーチセンター	地域イノベーション学研究科	教　授	三宅　秀人
4	三重大学次世代型VLPワクチン研究開発センター	医学系研究科	教　授	野阪　哲哉
5	三重大学次世代創薬ゼブラフィッシュスクリーニングセンター	医学系研究科	講　師	島田　康人
6	三重大学コーディネート育種基盤創生リサーチセンター	生物資源学研究科	准教授	諏訪部圭太

卓越型リサーチセンタの一例（次世代型VLPワクチン研究開発センター）

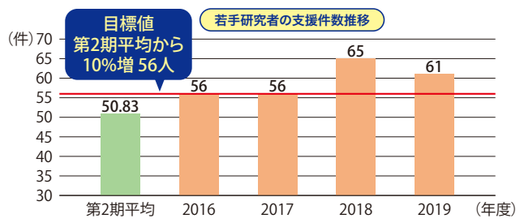
●若手リサーチセンター

2020年4月1日現在

番号	センターの名称	代表者名		
1	三重大学モーションコントロールリサーチセンター	工学研究科	助　教	矢代　大祐
2	三重大学新たな需要を喚起する循環型農業リサーチセンター	生物資源学研究科	講　師	坂井　勝

2. 若手研究者の支援

若手研究者（39歳以下）による研究と異分野（複数の学部・研究科、学科）の連携研究及び国際共同研究を強化するために、海外で開催される学術研究集会の旅費支給、研究資金及び研究スペースの提供を行っています。



3. 共同研究機器の整備

設備整備に関するマスタープランを作成し、それに基づき計画的に設備を整備しています。

高速液体クロマトグラフ質量分析装置

試料水平型多目的X線回折測定装置

4. 地域拠点サテライトに関連する研究センター・学舎等

地域の特色ある教育研究を産学官連携で推進する研究の拠点として設置しています。

（1）伊賀サテライト（国際忍者研究センター、伊賀研究拠点）
（2）東紀州サテライト（東紀州教育学舎、東紀州産業振興学舎）
（3）伊勢志摩サテライト（海女研究センター）
（4）北勢サテライト（知的イノベーション研究センター）

5. 連携大学院

学術および科学技術の発展に寄与するために、連携大学院の協定を個別に締結しています。

農研機構野菜花き研究部門、増養殖研究所、森林総合研究所関西支所、太陽化学㈱、医薬基盤研究所、成育医療研究センター、三重中央医療センター、三重病院等

社会連携・地域貢献

教育と研究を通して地域と連携

三重大学は、教育と研究を通じて地域づくりや地域発展に寄与するとともに、地域社会との双方向の連携を推進します。地域に根ざした知の支援活動と、産学官民連携の強化と推進を図ります。

社会連携

本学では、自由で独創的な知の創造という大学の教育・研究の特性に根ざした、産・学・官の連携交流の拠点を整備することにより、社会的に貢献し得る新たな知を科学と技術の両面にわたって創造することが、大学の活性化と社会への寄与に極めて重要な意義を持つものと考え、社会連携活動を活発に取り組んでいます。

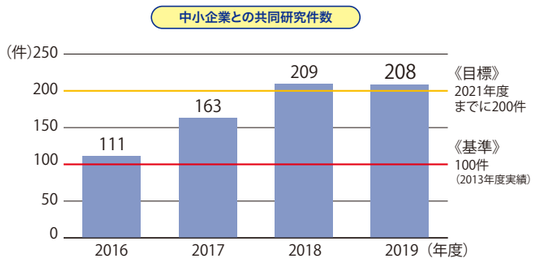
主な取り組みには、2014年4月に三重県と共同で設置した「三重県・三重大学　みえ防災・減災センター」において、みえ防災塾や専門職防災研修などを開講し、防災人材の育成・活用を図るとともに、地域・企業支援、情報収集・啓発、調査研究等の地域防災力の向上に向けた活動に取り組んでいます。また、2018年4月からは、地域創生戦略企画室（旧：地域戦略センター）を設置し、地方自治体との連携によって、地域が抱える産業育成、地域振興、観光政策、環境政策等の諸問題に対する政策提言等を行う活動に取り組んでいます。

その他、以下に示す「三重大学中小企業との共同研究スタートアップ促進事業」「三重大学地域貢献活動支援事業」などにも取り組んでいます。

中小企業との共同研究スタートアップ促進事業

本学では、2017年度から「三重大学中小企業との共同研究スタートアップ促進事業」の取組なども開始して、2013年度に100件であった契約件数を200件に倍増させる取組を推進しており、2018年度・2019年度には目標の200件を上回る結果となっています。

件数の増加とともに、共同研究については、これまでの4年間で、契約企業のすそ野も広がり、今後は、さらに大型の共同研究契約の獲得を目指します。

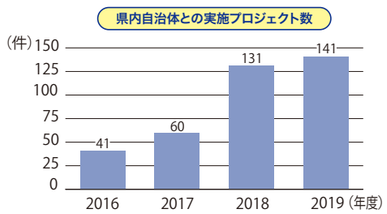


地域貢献活動支援事業

本学の地域への貢献については、2008年度から開始した「三重大学地域貢献活動支援事業」があります。この取り組みは、本学の教職員を代表者とする教育・研究に基づく自主的な活動を「三重大学地域貢献活動」として助成支援するものです。

助成対象は、本学教職員が県内地方自治体、NPO等の事業共同実施者と一緒に行う地域貢献活動で、将来的には自立化を目指すこととしています。

この取り組みは、2016年度からスタートした「三重大学地域拠点サテライト構想」により、4つの地域サテライト（北勢、伊賀、伊勢志摩、東紀州）が順次整備されており、今後は4つのサテライトと地域創生戦略企画室が、それぞれの地域において地域貢献活動支援を推進し、より地域に密着した支援が行える体制づくりを目指します。



県内自治体による資金で実施する共同研究・受託研究・受託事業
および本学地域貢献活動支援事業により実施した県内自治体との プロジェクト件数

第1回地域防災研究会「避難情報の発表」での様子

外部資金

外部資金（共同研究・受託研究・寄附金・科学研究費）

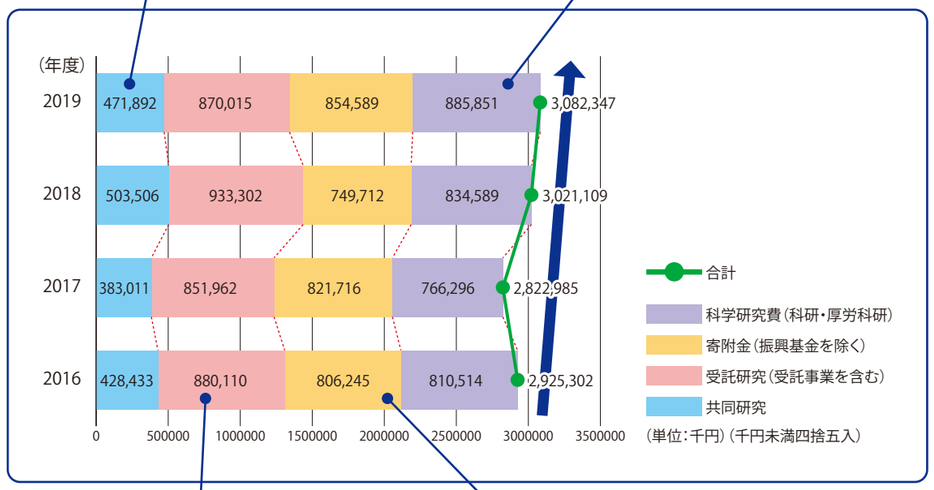
下表は、外部資金の種別ごとに、部局別の2016年度から4年間の受入額を示したものです。第3期の外部資金獲得額については、期首から4年経過時点で増加傾向となっています。

共同研究

区分	2016	件数	2017	件数	2018	件数	2019	件数
人文	千円 2,346	2	千円 2,736	4	千円 3,490	7	千円 3,196	8
教育	33,351	10	2,752	9	3,792	14	4,123	19
医学・病院	228,412	65	203,487	65	285,740	56	287,596	54
工学	82,428	79	93,880	80	95,223	95	73,393	95
生物資源	57,317	63	47,387	81	77,652	112	61,951	116
地域イノベ	18,160	23	17,298	25	26,044	19	18,599	27
その他センター等	6,418	9	15,471	17	11,566	31	23,034	22
合計	428,433	251	383,011	281	503,506	334	471,892	341

科学研究費（科研・厚労科研）

区分	2016	件数	2017	件数	2018	件数	2019	件数
人文	千円 29,691	39	千円 28,258	36	千円 41,210	40	千円 48,201	47
教育	51,645	60	55,665	65	63,310	65	51,164	57
医学・病院	392,553	219	335,842	225	389,342	234	392,684	241
工学	147,400	73	132,120	71	124,410	66	133,778	70
生物資源	103,049	81	129,378	82	133,648	87	184,529	88
地域イノベ	40,305	16	52,795	15	43,760	13	39,290	11
その他センター等	45,871	39	32,238	34	38,909	34	36,205	34
合計	810,514	527	766,296	528	834,589	539	885,851	548



受託研究（受託事業含む）

区分	2016	件数	2017	件数	2018	件数	2019	件数
人文	千円 2,696	3	千円 3,409	4	千円 2,580	3	千円 1,519	2
教育	18,735	15	15,220	12	18,315	14	16,997	15
医学・病院	524,303	124	551,139	122	644,198	115	547,275	110
工学	161,621	18	62,968	11	100,898	19	139,557	27
生物資源	96,965	42	89,818	40	94,023	45	98,124	44
地域イノベ	24,605	6	89,308	9	41,862	5	33,830	3
その他センター等	51,185	12	40,100	14	31,426	11	32,713	13
合計	880,110	220	851,962	212	933,302	212	870,015	214

寄附金（振興基金を除く）

区分	2016	件数	2017	件数	2018	件数	2019	件数
人文	千円 100	1	千円 200	2	千円 600	4	千円 200	2
教育	4,200	5	6,650	6	2,300	2	2,650	4
医学・病院	648,121	1,058	697,206	1,085	624,483	1,047	718,224	1,299
工学	59,127	61	44,964	49	54,031	61	63,596	71
生物資源	37,160	48	39,784	49	41,182	58	40,415	62
地域イノベ	16,394	19	3,000	4	3,587	4	5,519	8
その他センター等	41,143	33	29,912	29	23,529	21	23,985	51
合計	806,245	1,225	821,716	1,224	749,712	1,197	854,589	1,497

三重大学地域拠点サテライト

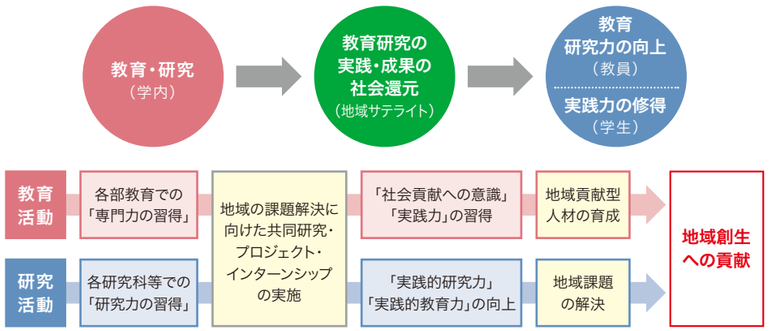
三重大学では地域創生への取り組みの一つとして、2016年度から「地域拠点サテライト」による活動をスタートさせました。

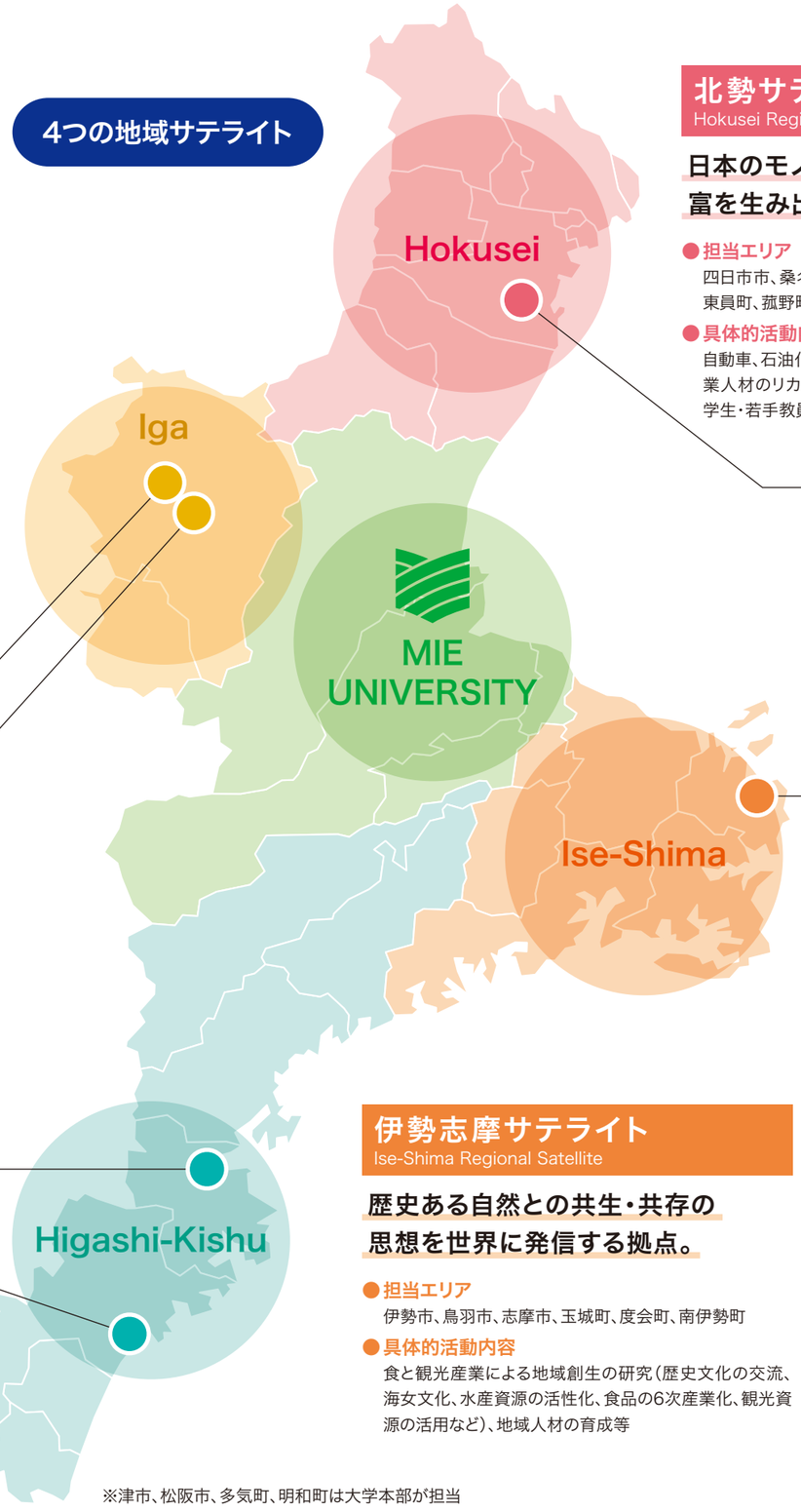
「地域拠点サテライト」では、県内全域を教育研究フィールドと位置付け、地元企業や自治体と大学を繋ぐハブ機能として、多様な地域特性を有する4つの地域サテライト（北勢サテライト、伊賀サテライト、伊勢志摩サテライト、東紀州サテライト）を展開しています。地域の課題・特性に応じた社会還元・実践的な教育研究力向上を目指し、自治体や教育機関等との連携・協力のもと、各地域サテライトに特色豊かな活動拠点を設置しています。

教育研究機能の強化を通じた地域創生へ貢献

4つの地域サテライトと活動拠点が、大学近隣にとどまらない県内全域での活動を推進するとともに、教員や学生がフィールドワーク等の実践的な教育研究活動を展開するほか、企業や自治体との共同研究・共同プロジェクトを通じた地域の課題解決等に全学的に取り組みながら、大学の教育研究力の向上に加え、地域創生や地域の人材育成に貢献しています。

教育研究機構の強化を通じた地域創生への貢献





北勢サテライト
Hokusei Regional Satellite

日本のモノづくりの真髄を体感し富を生み出す拠点。

●担当エリア
四日市市、桑名市、鈴鹿市、亀山市、いなべ市、木曽岬町、東員町、菰野町、朝日町、川越町

●具体的活動内容
自動車、石油化学、食品化学企業等との産学連携事業、企業人材のリカレント教育、モノづくり企業との連携による学生・若手教員の育成等

知的イノベーション研究センター
（四日市市：ユマニテクプラザ内）

伊賀サテライト
Iga Regional Satellite

固有文化と地域資源の活用で地域再生に寄与する拠点。

●担当エリア
名張市、伊賀市

●具体的活動内容
忍者等の歴史・文化、医薬品企業との連携、森林資源の活用等

伊賀連携フィールド・
国際忍者研究センター
（伊賀市：ハイトピア伊賀内）

伊賀研究拠点
（伊賀市：ゆめテクノ伊賀内）

伊勢志摩サテライト
Ise-Shima Regional Satellite

歴史ある自然との共生・共存の思想を世界に発信する拠点。

●担当エリア
伊勢市、鳥羽市、志摩市、玉城町、度会町、南伊勢町

●具体的活動内容
食と観光産業による地域創生の研究（歴史文化の交流、海女文化、水産資源の活性化、食品の6次産業化、観光資源の活用など）、地域人材の育成等

海女研究センター
（鳥羽市：海の博物館内）

東紀州サテライト
Higashi-Kishu Regional Satellite

地域資源で富を生み力強い子供が育つことを支える拠点。

●担当エリア
尾鷲市、熊野市、大台町、大紀町、紀北町、御浜町、紀宝町

●具体的活動内容
地域に根ざした教育、水産増養殖・加工業との連携、森林資源や観光資源の活用等

東紀州産業振興学舎
（尾鷲市：天満荘）

東紀州教育学舎
（熊野市：三重県立木本高校旧南風寮）

※津市、松阪市、多気町、明和町は大学本部が担当

4つの地域サテライトの活動紹介

北勢サテライト〈2018年度開設〉

大学院工学研究科公開セミナー ～みんな見せます工学研究科～

大学の活動について、地域の方々に少しでも理解を深めて頂くために、「みんな見せます」をテーマとした工学研究科の全活動を紹介する初めてのイベントとして開催しています。この企画により、大学での研究成果の地域還元を促進し、共同研究・インターンシップ・人材育成へと発展させ、三重県の地域創生へと繋げます。2019年度は専攻ごとに全5回開催し、県内企業・自治体関係者を中心に、延べ349名参加しました。

北勢サテライト主催の講習会「イーブニング・アカデミア」

日中は仕事をしている社会人向けのリカレント教育を目的とした講習会です。令和元年度は北勢サテライト長が講師を務め、「仕事に役立つデータサイエンスとは何か？－統計学の基礎からEXCELで学習し、変量の予測値を求める－」と題したデータサイエンス（統計解析）の入門講習を実施しました。データサイエンスを理解するための基礎となる統計学を、コンピューターを活用した演習とグループ学習により体験的に学、Society5.0、SDGsを推進する人材を育成します。

SDGs研究会

2015年国連サミットで採択された「国連持続可能な開発目標（SDGs）」について地域の自治体や企業、本学学生・教職員が学び、実行するためのプラットフォームとなる取り組みです。地域と国際の両面を視野に入れた政策提案と人材育成を目指します。

健康福祉システム開発研究会

今後益々進む超高齢社会で、高齢者が肉体的にも精神的にも健康に生活できるよう支援するシステムの実現を目指し、課題抽出から社会実装まで、企業や自治体との産学官連携による研究開発を行います。

地域研究フォーラム in 四日市

大学院人文社会科学研究科の講義科目「三重の文化と社会Ⅰ・Ⅱ」にて、北勢地域をフィールドとした研究を実施しました。最終報告として市民や関係者を対象に現地発表会を行いました。

教養教育公開講座 in 四日市

「音を診る－騒音の計測と評価－」「意味を読む－コミュニケーションはどのように成り立つのか－」をテーマに、クイズやゲームなどを取り入れた講演を行い、25名が参加しました。

伊賀サテライト〈2016年度開設〉

学際的・国際的 忍者研究の展開

国際忍者研究センターでは、史料等の調査研究のほか、忍術書の内容を科学的に検証するなど、文系理系の各専門分野の教員が協力して研究活動を進めています。2018年2月には、国際的な情報の集約と発信による研究の発展を目的に国際忍者学会を設立し、国内外の研究者による議論も活発に行われています。忍者文化は世界的にも関心が高く、海外での講演会も実施しています。

全国忍者調査プロジェクト（略称「忍プロ」）

2018年8月から、全国の教育委員会・博物館・文書館等900ヶ所に調査票を送付し、全国に点在する忍者学関係史料の調査･収集を行うプロジェクトを進めています。収集した情報はデータベース化を行い、一般公開も予定しています。この取り組みにより、今後のさらなる研究の発展が期待できます。

健康科学食品研究会

食の機能性と健康の観点から、専門家による話題提供を基にした意見交換を行っています。これにより、伊賀地域の企業と連携し、地域産業の支援を進めています。

忍者・忍術学講座

学内外の忍者に関する研究者を講師とした市民講座「忍者・忍術学講座」を毎月1回開催しています。2019年度は延べ1,151名が参加しました。

産学官連携セミナー in 伊賀

地域の進展に向けて産学官連携の在り方を考える機会として、毎年テーマを変えて開催しています。2019年度は127名が参加しました。

「こども大学」開催

子供たちに科学の楽しさを伝え興味を持ってもらうことで、将来地域に貢献できる人材の育成を目指して毎年開催する取り組みです。本学学生・教職員、自治体職員が講師として参加しています。

伊勢志摩サテライト〈2017年度開設〉

伊勢志摩サテライト交流会

伊勢志摩サテライト関係自治体（全6市町）と本学教職員が参加し、全員で伊勢志摩の地域創生を考えるフラットな勉強会です。テーマに即した教員による知見の提供をもとに意見交換・情報共有を行い、課題解決や地域創生の糸口を探ります。2018年度からこれまでに全11回延べ271名が参加し、大学をハブとして市町間の横の繋がりも強まり、組織の枠を超えた新たな地域共創の動きも生まれています。

海女の歴史・文化関係 アーカイブのデータベース構築

海女に関する画像・映像、古文書、民俗資料などの文化的価値の高い海女関係資料をデジタル化して文化財の保護に寄与するとともに、データベース化を進めることで海女研究の基礎的な資産を構築する取り組みです。これまでに書籍720件、論文524件の書誌データと、約2万3千件の画像データのデジタル化を行いました。これらは基礎研究・応用研究の進展に用いるだけでなく、情報発信や展示会・映写会等に活用し、海女文化の理解と地域振興に貢献します。

海女漁村の空間（景観）構造調査研究

海女漁村の文化的景観の保全活用として、海女文化を体験できるモデル地区整備に向けた景観計画を自治体と協働して策定し、県内初となる国の重要文化的景観選定を目指します。

若者の観光を促進する参加型観光商品開発に向けた基礎的研究

伊勢志摩地域における若者の観光需要を喚起させる参加型観光商品開発を目指して、学生参画のもと伊勢志摩圏の文化や産業に関する調査、フィールドワークを実施しています。

南伊勢町まちづくりリーダー交流会

本学教員がコーディネーターとして参画する南伊勢町の地域リーダー養成を目的しとた定期的な交流会です。地域の若手人材や高校生・教員等を対象に地域の将来を牽引する人材養成を推進しています。

学生を主体とした地域連携活動

地域での学生活動を支援する取り組みです。2018年度は医学部生を中心とした学生団体による、志摩市の海水浴場での応急救護活動を支援し、救急車の適正利用と利用者の満足度向上に寄与しました。

東紀州サテライト〈2016年度開設〉

藻場再生事業

東紀州は、豊かな海（黒潮）からの恩恵を受ける、漁業が盛んな地域です。しかし最近では「磯焼け」という海藻が繁茂しなくなる現象により漁獲高が減少しており、漁業者にとって深刻な問題となっています。本学では、自治体と連携し調査研究結果を取りまとめた「三重県版磯焼け対策ガイドライン」に沿って、水産資源や環境を守るため、ウニ類（ガンガゼ）の除去等、藻場の再生プロジェクトを実施しています。

複式学級に対応した小学校外国語（英語）教育

東紀州地域では、多くの小学校が複式学級で授業を行っていますが、複式学級に対応した外国語の指導法が確立されていません。そこで東紀州教育学舎では、2020年に教科化される小学校英語にICTの活用を含めた年間指導計画を作成し、出前授業等の場で実践しています。さらに、他の複式学級を抱える地域でも活用されるよう情報発信を行うとともに普及を目指しています。

教育アプリの開発

東紀州教育学舎で、児童生徒が手軽に画像を撮影し音声付きで短い作品が作れるアプリ「くまた」を設計・実用化したほか、本学大学院工学研究科と協働で、英語の綴りと発音を学べるアプリ「Let's フォニックス」を開発し学校現場で実践しています。

インバウンド拡大への取り組み

東紀州地域の企業と連携し、本学留学生の視点から見た外国人観光客の誘致における課題について、モニターツアーやヒアリング、エージェントとの交流会などを通して集約し、東紀州の地域性に富む新たな観光商品の開発・提案につなげることを目指しています。

自然環境リテラシー学

生物資源学部の専門科目です。4泊5日の現地合宿型実習を通して、自然環境と人間が相互に与えあう影響（地域文化を含む）を理解し、自然環境を保護・保全し、情報発信できる広範な知識および技能（=自然環境リテラシー）を習得したリーダーを育成します。

プログラミング教育の出前授業

2020年から必修化されるプログラミング教育について、スクラッチやスクラッチ・ジュニアを利用して、各教科等でプログラミング教育を実施できるように、小中学校への出前授業や教員研修等の教育支援を行っています。

地域創生戦略企画室

地域貢献型大学を掲げる三重大学は、教育力・研究力の強化と深化を図るとともに、教育研究成果を積極的に社会に還元し、地域創生に寄与することを重要な使命と位置付けています。

この使命を具現化するため、2018年4月、本学の本部機能として「地域創生戦略企画室」を設置しました。この地域創生戦略企画室は学長がトップとなり、地域創生に向けた強いリーダーシップの下、本学が地域の企業や自治体等との組織対組織による戦略的なプロジェクト（地域創生プロジェクト）を企画・展開することで、本学における教育・研究の深化に寄与します。さらに、この地域創生プロジェクトに学内の教職員・学生、あるいは地域の企業や行政職員が参画することで、地域共創を牽引する基幹人材の育成を目指します。

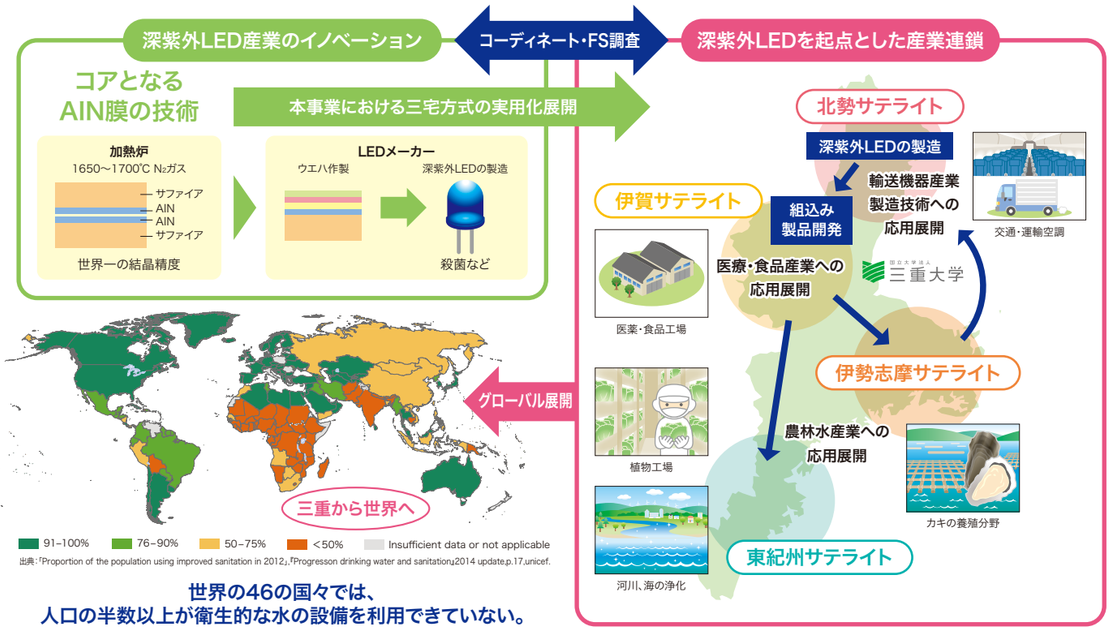
文部科学省 地域イノベーション・エコシステム形成プログラム
地域創生を本気で具現化するための応用展開『深紫外LEDで創生される産業連鎖プロジェクト』

地域イノベーション・エコシステム形成プログラムとは、地域の成長に貢献しようとする地域大学に事業プロデュースチームを創設し、地域の競争力の源泉（コア技術等）を核に、人材や技術を取り込み、グローバル展開が可能な事業化計画を策定します。この具体化に向け、社会的インパクトが大きく、また地域の成長とともに国富の増大に資する事業化プロジェクトを推進することにより、日本型イノベーション・エコシステムの形成と地方創生を実現するものです。

三重大学の拠点計画のテーマは、「地域創生を本気で具現化するための応用展開『深紫外ＬＥＤで創生される産業連鎖プロジェクト』」で、西村訓弘副学長・教授を本事業プロデューサー、三宅秀人地域イノベーション学研究科長・教授を中心研究者とし、三重大学が確立した「深紫外LED」の基板作製などの技術により、飛躍的な製造コスト低減を実現可能とし、その産業振興をLEDメーカーおよび地域アセンブリメーカーと連携して進めます。これにより、地域内で関連産業を育成するとともに、深紫外LEDを使った殺菌等の応用技術を農業・水産業へ普及させ、地域創生を推進します。

「窒化物半導体の結晶成長における高品質化技術」の三重県への応用分野

三宅研究室のコア技術を利用して高精度基板を作成することにより、深紫外LED等の量産を可能とし、また、それらのデバイスを活用したアプリケーション開発を行うことにより、三重県の産業振興への展開が期待されます。
さらに、殺菌等の応用技術をグローバル展開することで、世界中のより多くの人々へ衛生的な水を提供することを可能にします。
本事業ではFS調査や製品化テストを促す施策等を通じて、その実現を加速させます。



**世界の46の国々では、
人口の半数以上が衛生的な水の設備を利用できていない。**

みえ地域共創塾

地域創生を牽引する自治体職員の人材育成と、自治体と大学との連携基盤強化を目的とした取り組みです。「みえ地域共創塾」では、「真の課題解決に向けた論理的思考力の強化」を特色として、塾生と講師が双方向で創り上げるスタイルをコンセプトに、その年に挑戦する塾生に応じたオーダーメイドのプログラムを設計します。講師による助言に加え、異なる市町の塾生同士が共に学び合い、共にアイデアを出し合いながら、地域の課題解決に資する事業構想や事業実施後のディレクションに必要な力を育み、三重の未来を共創します。

みえ農業版MBA養成塾

三重県農業大学校と三重大学、民間農業法人の産学官の連携により、異業種からの農業参入を促し、新たに農業ビジネスを志す人材を育成することを目的とした取り組みです。それぞれの専門領域を融合することで、広範な科目に対して質の高いプログラムを提供します。農業分野だけに特化せず、食の安全やバリューチェーンに係るフードマネジメント、設定した課題の解決を図るプロジェクトマネジメント演習や将来の自らの経営プラン策定など、経営管理を行う当事者として必要な知識を幅広く学ぶことができます。

民間の農業法人等での年間1,500時間に及ぶ雇用型インターンシップにより実践経験を積み、実際の経営者やマネージャーの側で農業ビジネスの視座を高めることができます。

さらに、地域イノベーション学研究科（修士）との併学が可能で、養成塾で学びながら入学し、所定の単位を修得できれば、修士号の学位を取得することができます。

みえ農業版MBA養成塾 産学官の強力な連携

●その他の企画・プロジェクト等（進行中案件を含む）

	名称	連携先
地方創生に向けた協議会	産学官連携による地域活性化に向けた5者連携協議会	三重県、三重県産業支援センター、東京大学地域未来社会連携研究機構、学校法人みえ大橋学園
	地域金融機関との連携協議会	㈱百五銀行・㈱百五総合研究所、㈱三重銀行・㈱三十三総研
地域人材育成、次世代経営者・企業人材育成	みえの若き経営者育成塾、MIEグローバル・スタートアップカフェ	三重県
	紀北町チャレンジプラス事業、紀北町まちおこし次世代育成事業	紀北町
	中小企業伴奏型支援事業	松阪市
	大台創生塾	大台町
	まちづくりリーダー交流会	南伊勢町
	紀宝町元気塾	紀宝町
実践的教育機会の創出	県内企業連携による実世界データを用いたデータサイエンティスト育成プログラム	㈱EBILAB、ゑびや大食堂
	耕作放棄地解消のための産学官連携プロジェクト	三重県、津市、町屋地区荒廃農地対策協議会
	東ワシントン大学アントレプレナーシップセミナー	Eastern Washington University
	尾鷲高校生地域人材育成共同研究「まちいく」	尾鷲高校、尾鷲市、紀北町
産業振興・雇用再生	VISON（アクアイグニス多気）開発プロジェクト	多気町
	JAグループとの地域課題解決に関するプロジェクト	JAグループ三重
	「i-都市再生」災害情報可視化による市民・行政の都市再生・まちづくり意識向上調査〈内閣府〉	尾鷲市
	外国人材・留学生による県内企業での国際インターンシップの推進	三重県、県内企業、タイ・カセサート大学、台湾・南海科技大学

国際交流

三重から世界へ　Global for Local , Local for Global

国際交流のHPはこちらから➡

三重大学は、大学間レベルで25ヵ国・地域、66大学・機関、学部間レベル26ヵ国・地域、55大学・機関と学術交流協定を締結し、学生の派遣・受入や国際共同研究を行っています。さまざまな海外留学プログラムや留学生受入プログラムにより、海外留学と留学生の受け入れを促進し、キャンパス内で日本人学生と留学生の相互交流による国際体験ができる環境を目指しています。

●大学間協定　●学部間協定

スペイン
●バレンシア州立工芸大学　●ジャウメプリメル大学

フランス
●サボア・モンブラン大学
●シャルル・ド・ゴール・リール第3大学（人文）
●リヨン政治学院（リヨン第2大学）（人文）
●パリ工芸大学（ENSAM）（工）

ベルギー
●ゲント大学生物科学工学部（生物資源）

英国
●カーディフ大学
●セントラル・ランカシャー大学
●シェフィールド大学英語教育センター（教養教育院）

ノルウェー
●ベルゲン大学医歯学部（医）

スウェーデン
●ルンド大学人文・神学学部（人文）
●イェーテボリ大学健康科学部（医）

ドイツ
●エアランゲン・ニュルンベルク大学
●ハイデルベルク大学
●ボーフム大学
●ライプチッヒ大学
●ロストック大学医学部（医）
●フライブルク応用科学カトリック大学（医）
●ロイトリンゲン大学工学部（工）

ブルガリア
●ソフィア大学

イタリア
●ペルジア大学医学部（医）
●パドヴァ大学マネジメント工学部・土木環境建築工学部（工）
●メッシーナ大学医学部（医）

ギリシャ
●国立アテネ工科大学（工）

モロッコ
●ハッサン2世農獣医大学（生物資源）

ガーナ
●ガーナ大学医学部（医）

ザンビア
●ザンビア大学

タンザニア
●ムヒンビリ健康科学大学医学部(医)

アラブ首長国連邦
●シャルジャ大学

インド
●アムリタ大学医学部（医）

ミャンマー
●ヤンゴン第一医科大学（医）
●マンダレー医科大学（医）
●ヤンゴン第二医科大学（医）
●パテイン大学大学院農業科学・海洋科学研究所（生物資源）

タイ
●チェンマイ大学
●カセサート大学
●コンケン大学
●スラナリー工科大学
●タマサート大学　●メジョー大学
●モンクット王ラカバン工科大学工学部（工）
●モンクット王トンブリエ科大学生物資源学研究科（生物資源）

カンボジア
●王立プノンペン大学

インドネシア
●IPB大学
●スリウィジャヤ大学
●ハルオレオ大学　●パジャジャラン大学
●ガジャ・マダ大学工学部（工）
●ガジャ・マダ大学数学自然科学学部（工）
●バンドン工学大学数学自然科学学部（工）

ウズベキスタン
●タシケント国立法科大学

ベトナム
●外国貿易大学
●ホーチミン市師範大学
●カントー大学
●ベトナム科学技術院（VAST）エネルギー科学研究所（IES）（工）
●ホーチミン市工科大学機械工学部・応用科学部・材料工学部（工）

バングラデシュ
●バングラデシュ農業大学
●バンガ バンドゥ シャイク ムジブ医科大学（医）

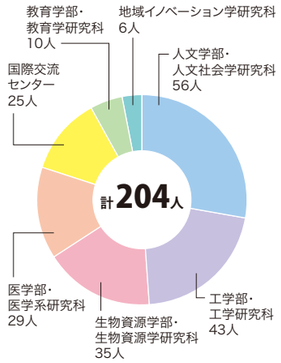
モンゴル
●モンゴル国立大学

ロシア
●ハバロフスク国立経済法律大学

外国人留学生数

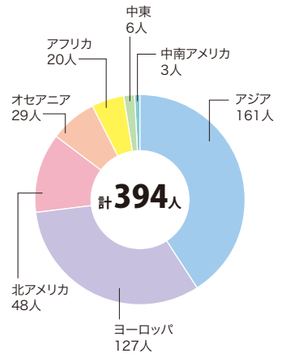
（2020年5月1日現在）

外国人留学生数（学部・研究科等別）



海外留学・研修学生数

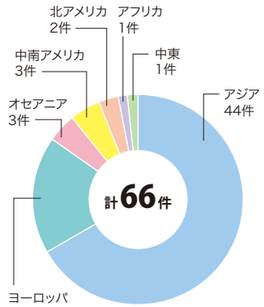
（2019年度）



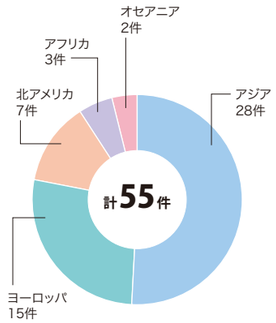
国際交流状況

（2020年4月1日現在）

海外大学間協定数（25ヵ国）



海外大学学部間協定数（26ヵ国）



韓国
●東国大学校　●中央大学校　●梨花女子大学校
●世宗大学校　●済州大学
●釜慶国立大学校水産科学学部・環境海洋学部（生物資源）

中国
●江蘇大学　●雲南大学
●廣西大学　●北京外国語大学
●西安理工大学　●中国社会科学院日本研究所
●天津師範大学　●上海交通大学医学院（医）
●江南大学　●廣西医科大学（医）
●南京工業大学　●蘭州大学第二臨床医学院（医）
●河南師範大学　●清華大学熱能工程系及び工程力学系（工）
●上海海洋大学　●浙江大学理学院（工）
●内蒙古工業大学　●南開大学日本研究院（人文）
●延辺大学　●北京理工大学外国語学院（教育）
●安徽農業大学

台湾
●国立高雄師範大学　●国立金門大学
●国立台湾海洋大学　●中山大学
●南台科技大学　●真理大学
●国立成功大学化学工程系所（工）
●財団法人資訊工業策進会台日産業推動センター（地域イノベーション推進機構）
●高雄医学大学産学營運處（地域イノベーション推進機構）

フィリピン
●サンカルロス大学
●フィリピン大学マニラ校保健学部（医）
●セントラル・ルソン州立大学（生物資源）

ラオス
●ラオス健康科学大学（医）

フィジー
●フィジー国立大学
●南太平洋大学

マレーシア
●プトラマレーシア大学　●タチ大学
●マレーシアトレンガヌ大学（生物資源）

ニュージーランド
●オークランド大学教育学部（教育）

オーストラリア
●タスマニア大学　●フリンダース大学医学部（医）

アメリカ
●ノースカロライナ大学ウイルミントン校
●ハワイパシフィック大学
●マーサー大学医学部（医）
●ウェイン州立大学医学部（医）
●ニューメキシコ大学医学部（医）
●財団法人クリーブランドクリニック医用生体工学ラーナー研究所（工）
●ワシントン大学医学部（医）
●サウスシアトル・コミュニティカレッジ（地域イノベーション推進機構）
●東ワシントン大学（地域イノベーション）

ブラジル
●サンパウロ大学

ペルー
●国立ラ・モリーナ農業大学
●カジェタノ・エレディア大学

Tri-U国際ジョイントセミナー＆シンポジウム

Tri-U国際ジョイントセミナー＆シンポジウムは、三重大学（日本）、チェンマイ大学（タイ）、江蘇大学（中国）の3大学が交代でホスト校をつとめ毎年開催している国際交流を兼ねた英語による研究発表会で持続可能な社会の実現を目的としています。2011年度よりボゴール農科大学（インドネシア）、2018年度には廣西大学（中国）が新たなホスト校として加わり、現在は5大学がホスト校をつとめています。2019年度はアジアの13大学が江蘇大学に集まり、参加者は英語で研究発表やワークショップを行いました。

2019 Tri-U国際ジョイントセミナー＆シンポジウム

天津師範大学とのコンセクティブディグリープログラム（接続学位制度）

本学は天津師範大学との協定に基づき、2009年4月から学生を受け入れてきたダブルディグリープログラムの後継としてコンセクティブディグリープログラム（接続学位制度）を制定し2019年4月から学生を受け入れています。

このプログラムは、天津師範大学の国際教育交流学部の3年生の学生が毎年20名程度、1年間本学に留学した後帰国して卒業し、さらに優秀な学生については一般入試を受け、合格者は本学大学院に10月または翌年4月に進学するというプログラムです。

高い日本語レベルと国際感覚を備えたグローバルな人材を育成します。

ミッション

❶ 高いレベルの日本語を習得
❷ 専門知識の習得
❸ キャンパスの国際化

コンセクティブディグリープログラム第1期生向けの集中講義（2019年12月）

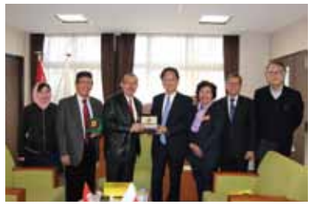
ダブルディグリープログラム（複数学位制度）

本学は海外の大学と学位授与に関する協定を結び、両大学の学生が双方の大学に在籍し、必要な単位を取得するダブルディグリープログラムを、大学院レベルでスリウィジャヤ大学及びパジャジャラン大学（インドネシア）との間にて実施しています。

国際感覚、広い視野と専門知識を備えたグローバルな人材を育成します。

ミッション

❶ 双方の大学の学位を修得
❷ 異文化体験を通じて国際感覚を養う
❸ 海外体験を通じて実践的な語学能力の向上
❹ キャンパスの国際化を加速


ダブルディグリープログラム

独立行政法人国際協力機構（JICA）との連携

本学と独立行政法人国際協力機構（JICA）は、開発途上国への国際協力および学術研究・教育の発展に寄与することを目的として、2014年に連携覚書を締結しました。特に医学研究科や生物資源学研究科では多くの教員がJICA派遣専門家として海外において、専門分野の技術協力に長期にわたり活躍しています。現在、SDGｓの推進とその実現を目指して全学を挙げて、様々取り組んでおり、JICAの事業推進の方向性が一致し、連携を通して多くの成果が期待できることから、2019年に連携覚書を更新しました。

連携覚書更新の調印式

国際交流イベント

留学生と日本人学生の国際交流行事として、また、本学のさらなる国際化を目的として様々なイベントを実施しています。4月・10月には、来日した留学生を歓迎し、交流を深める機会としてウェルカムパーティーを開催しています。また、12月・1月には、「国際交流DAYS」と称し、書道体験やスポーツ大会、海外留学研修報告会などの国際感覚を身につける様々なイベントを実施しています。

ウェルカムパーティー

書道体験

国際キャリアアッププログラム

国際交流センターでは、「国際キャリアアッププログラム」と総称して海外短期研修、サバイバル日本語講座、フィールドスタディなど様々な交流プログラムを実施しています。本学の学生であれば留学生を含めて誰でも受講および参加することができ、海外の大学へ留学を希望する学生に推奨しています。

	プログラム名	研修場所	国名
全学対象	Tri-U国際ジョイントセミナー＆シンポジウム	三重大学、チェンマイ大学、江蘇大学、ボゴール農科大学、廣西大学で交代で開催	日本、タイ、中国、インドネシア
	タチ大学夏期英語研修（8月）・タチ大学春期英語研修（3月）	タチ大学	マレーシア
	サマースクール（語学研修・水産実習）	マレーシアトレンガヌ大学	マレーシア
	ベトナム・フィールドスタディ	ホーチミン市師範大学	ベトナム
	ブリティッシュ・コロンビア大学夏期語学研修	ブリティッシュ・コロンビア大学	カナダ
	タイ文化研修	タマサート大学	タイ
	ドイツ文化研修	ライプツィヒ大学	ドイツ
	サウスカロライナ大学語学研修	サウスカロライナ大学	アメリカ
	中国文化研修	天津師範大学	中国
	済州大学 韓国語・韓国文化研修	済州大学	韓国
教養教育各部局	英語特別プログラム海外短期研修（教養教育院）	シェフィールド大学 英語教育センター	イギリス
	オックスフォード大学夏期英語研修（人文学部）	オックスフォード大学 ハートフォードカレッジ	イギリス
	海外教育研修（教育学部）	オークランド大学教育学部	ニュージーランド
	海外臨床実習, 早期海外体験実習（医学部・医学系研究科）	チェンマイ大学、フライブルク応用科学カトリック大学 等	タイ、ドイツ他
	海外短期インターンシップ（工学部・工学研究科）	海外の日本企業	マレーシア、タイ、フィリピン、ベトナム

※年度によりプログラム内容が異なることがあります。

ブリティッシュ・コロンビア大学夏期英語研修（カナダ）

参加者は、世界的な名門大学であるUBCのキャンパス内にある語学学校で英語力を向上させ、国際的視野を養います。期間は約3週間で、滞在はホスト・ファミリー宅です。授業では「書く、読む、聞く、話す」の4技能を学び、学生の習得状況に応じてディベート、プレゼンテーション、異文化交流、Global規模の問題等に取り組む授業が行われます。夏の平均気温は約15度で、美しい自然と多文化で活気のある都市の生活を経験できます。

タチ大学英語研修（マレーシア）

タチ大学は本学の協定校で、2017年度より約3週間の英語研修を夏休み期間（8月）と春休み期間（3月）に実施しています。本プログラムでは、タチ大学生との混合クラスによる英語授業が行われ、現地学生と一緒にグループワークやディスカッションを行います。様々な課外活動もあり、タチ大学の学生や教員との交流を通して実践的な英語力の習得と異文化への興味と理解を有する国際的な人間性の育成を目指します。

三重大学国際交流奨学制度

本学では、学業成績が優秀な学生に対して、海外留学、本学が実施する国際交流事業への参加、海外協定校からの短期留学及びダブルディグリープログラムによる派遣など充実した三重大学国際交流特別奨学生制度を設けています。また、海外から優秀な大学院留学生を安定的に確保することを目的とした「三重大学私費外国人特待留学生制度」により12名を採用するなど、留学しやすい環境を整えています。そのほか、私費留学生がより良い環境で研究・学習に集中できるよう、「三重大学三重県民共済奨学金（6名採用）」をはじめとした民間からの奨学金も充実しています。

環 境

環境活動

『環境先進大学』を標榜する三重大学は、「三翠（空・樹・波のみどり）と自然が調和・共生する潤いのあるキャンパス環境の創出」を中期目標の一つとして掲げています。また、本学は地域活性化の中核的拠点となることを志向して、USR（大学としての社会的責任）を果たすべく地域の方々との連携を重視した様々な施策を計画し、それを実践しています。

科学的地域環境人材（SciLets）育成事業

地域活性化の中核的拠点となることを志向する本学は、大学の機能強化戦略の一つとして、主に社会人を対象とした教育プログラムである「科学的地域環境人材（SciLets）育成事業」を実施しています。

SciLets育成事業は、多忙な社会人に配慮してインターネットで受講できるビデオ講義方式を採用し、e-ラーニングシステムによる理解度確認試験を実施して環境教育要件を満たしたことが確認できた受講者には「アナリスト」の資格を認定しています。さらに環境共同研究などの環境実践要件を満たした受講者には「エキスパート」の資格を認定しています。

本事業は「環境省中部地方環境事務所」と「三重県」の後援を得ています。また、県内の全自治体（29市町）を含めた140余の企業等が事業に協力する連携パートナーとなっています。

セミナー（文部科学省）

SciLets認定証授与式

本事業は、外部からの評価として『持続可能な社会づくり活動表彰／機構会長賞』と『第1回エコプロアワード／奨励賞』の二つのアワードを受賞しています。

持続可能な社会づくり活動表彰

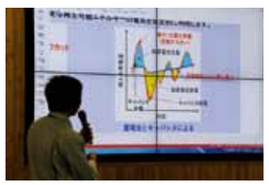
第1回エコプロアワード

スマートキャンパス

本学は、風や太陽光などの再生可能エネルギーを有効に活用し、変動するキャンパス内のエネルギー需要を安定させることおよび学内全体でスマート化と節電の行動によりキャンパスから排出するCO_2を削減することを目的としたスマートキャンパスを2011年度から運用しています。

スマートキャンパスは、創エネ設備（風力発電、太陽光発電、ガスコージェネレーション）、省エネ設備（デシカント空調、LED照明）、蓄電設備（不安定な電力需要を緩和しながらピークを制御するシステム）、そしてこれら設備の最適運用と監視を司るエネルギーマネジメントシステム（EMS）から構成されています。

また、この事業の実施で得られた省エネルギーに関する知見等については、学内外の学生・生徒への説明会（スマートキャンパスツアー）を通して広く地域に還元しています。



スマートキャンパスツアー

これまでに活動してきたスマートキャンパス事業は、大臣賞を中心とした5つの賞を受賞しています。

受賞
- ●2013年度『地球環境大賞』（文部科学大臣賞）
- ●2014年度『省エネ大賞』省エネ事例部門（経済産業大臣賞）
- ●2015年度『グリーン購入大賞』（環境大臣賞）
- ●2016年度『地球温暖化防止活動環境大臣表彰』（対策技術先進導入部門）
- ●2017年度『CAS-Net JAPANサステイナブルキャンパス賞』（建築・設備部門）

選定
- ●2019年度『IPEEC 省エネトップテン選考事業 国際リスト』（建築部門）
- ●2019年度『Asian Sustainable Campus Network 年次大会』事例集

TOP TENs 国際リスト

ASCN 2019年次大会

また、スマートキャンパス事業の一環として実施している『MIEUポイント（環境保全行動にインセンティブを与える仕組み）』の活動についても以下の賞を受賞しています。

受賞
- ●2019年度『エコマークアワード』（優秀賞）

エコマークアワード 2019

環境ISO学生委員会

環境ISO学生委員会は、学生主体でISO14001の認証取得を果たすことを目的として2006年に大学内に組織しました。今日に至ってはその枠にとらわれず、学生の自由な発想で環境活動を推し進めています。

現在の主な活動としては、「環境マネジメントシステムの構築（環境内部監査の実施、ISO14001のスキルアップセミナーの実施、環境方針に沿った環境活動の実施）」と「環境マインドの向上（環境報告書の作成、地域や行政と協働した海岸清掃の実施、各種イベントの開催、シンポジウムへの参加や開催）」等があります。

自転車譲渡

海岸清掃

古本市

環境フェア出展

本委員会は、環境活動の実践が外部に認められ、大臣賞を含む二つの賞を受賞しています。

受賞
- ●2017年度『地域環境保全功労者表彰』（環境大臣賞）
- ●2017年度『津市環境功労者表彰』

地域環境保全功労者表彰

津市環境功労者表彰

学長への報告

医学部附属病院

つながる医療、みえる未来

信頼と安心が得られる地域医療の拠点として、未来を拓く診療・研究を推進し、人間性豊かな優れた医療人を育成します。

病院概要

- 病床数 ※2020年3月現在 685床（一般655／精神30）
- 職員数 1,750人　医師・歯科医師 449人（医員・研修医含む）、看護師 713人、技師等 105人、事務系職員・その他 483人
- 指定状況等　エイズ治療拠点病院、地域災害拠点病院、三重県アレルギー疾患拠点病院、肝疾患診療連携拠点病院、小児がん拠点病院、がん診療連携拠点病院　など

三重大学病院のキャラクターが誕生しました！

三重大学病院キャラクター
ミーベとミッピ

三重大学病院では、高度救急、先端医療を、心の安らぎ・癒しと共に提供できる病院環境を構築するとともに、臓器別診療体制により、ほぼすべての医療領域をカバーすることができる専門診療科を開設し、さらに専門診療科および職種の異なる医療従事者を横断的・有機的につなげるためのセンター機能（周産母子センター、血管ハートセンター、緩和ケアセンターなど）を充実させることで、診療面において総合的なパワーアップが図られています。大学病院の使命である診療、研究、教育、地域貢献ならびに国際化の活動において、大きく飛躍できる基盤を整備しています。診療においては、三重県唯一の特定機能病院（高難度手術や先端医療を提供できる医療機関として厚生労働省に承認を受けた医療機関）として、高度急性期・急性期医療に携わり、三重県の医療における最後の砦として県民、市民の皆様のご期待に沿えるよう努力して参ります。

未来を拓く診療・研究を推進

●がんゲノム医療を牽引する高度機能医療機関として

がんセンターのない三重県において、本院は、「都道府県がん診療連携拠点病院（全国では51施設が指定）」、「小児がん拠点病院（全国では15施設が指定）」、「がんゲノム医療拠点病院（全国では34施設が指定）」の指定を受け、個々のがん患者に最適な医療を提供するため、県下の病院と密接なネットワークを構築し、最新かつ先進的ながん診断・治療を行っています。がんに対する治療としては、薬物治療（主に抗がん剤）、放射線治療、手術が標準治療ですが、これに対して、がんゲノム医療とは、主にがんの組織を用いて、多数の遺伝子を同時に調べ（がん遺伝子パネル検査）、がんの遺伝子変異を明らかにすることにより、一人一人の体質や病状に合わせて治療を行う全く新しい医療です。

2019年6月にがん遺伝子パネル検査が保険収載され、2019年9月に三重大学病院は全国34施設の一つであるがんゲノム医療拠点病院の指定を受けました。毎週、専門家会議（エキスパートパネル）を開催し、がん遺伝子パネル検査の結果を一例一例議論することで、がんゲノム医療の実践に取り組んでいます。本院は、「小児がん拠点病院」と「がんゲノム医療拠点病院」の指定の両方の指定を受けている7つの大学病院のひとつです。がんゲノム医療を牽引する高度な機能を有する医療機関であり続けることを目指しています。

小児がん拠点病院指定およびがんゲノム医療拠点指定

●2019年度救急救命センターの充実段階評価は、最も高い「S」評価を受けました

救命救急センターの機能強化やドクターヘリによる救急医療をより活発にし、3次救急のみならず、2次医療圏にもさらに救急診療活動範囲を広げ、生活習慣病、循環器系疾患に対しても、迅速にレベルの高い医療を行える病院として、診療機能を高めています。当院の救急救命センターは、「2019年度救急救命センターの充実段階評価」において、最も高い「S」評価を受けました。

●手術支援ロボット「ダ・ヴィンチ」の導入

中央手術部においては、各診療科が行う高度先端医療に対応するために、ハイブリッド手術室を完備して、臓器移植（腎移植・肝移植など）、新生児手術（複雑心奇型も含む）、ダ・ヴィンチを用いたロボット支援内視鏡手術、腹腔鏡・胸腔鏡などの鏡視下手術、センチネルリンパ節ナビゲーション手術から、日帰り手術まで幅広い手術に対応しています。

手術箇所（手術部位）	前立腺	腎	膀胱	肺	食道	胃	子宮
2019年度 ダ・ヴィンチ手術実績	88	31	8	13	13	15	86

ペイシェントカート（動作機器）

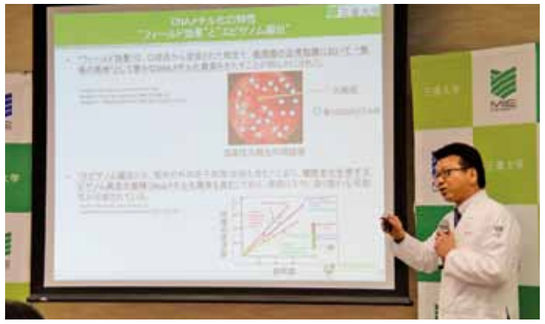
サージョンコンソール（操作機器）

ハイブリッド手術室におけるダ・ヴィンチを使ったロボット補助下手術

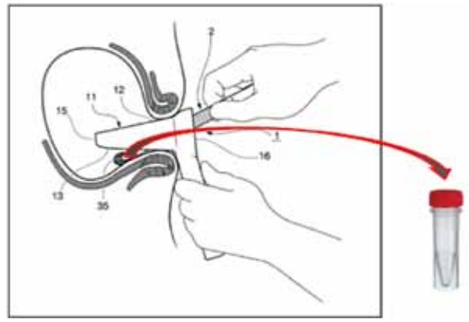
2017年より形成外科やリウマチ・膠原病センターの診療活動も開始し、2020年からは、リハビリテーション部教授が就任し、その充実を図ります。2019年10月には、痛みに関連した病気に悩んでいる患者様を総合的に診断し治療する「痛みセンター」を開設しました。社会のニーズである質の高い臨床研究、国際医療や災害医療に関する活動推進も行っています。特に臨床研究に関しては、本院の臨床研究開発センターが中心となり、県下の診療情報データベースを繋いだ30万人規模の地域圏統合型医療情報データベース事業（Mie-LIP DB）も実働が始まり、2018年4月1日より施行された臨床研究法を遵守した質の高い臨床研究の推進にも重要な機能を発揮しています。

人々の健やかな未来を築く多様な臨床研究の実施

本院では診療とともに、様々な臨床研究が行われています。2020年1月にはEAファーマ株式会社との共同研究による、潰瘍性大腸炎患者に発生する大腸がんに特化した世界初のがん化リスク診断法の開発について発表いたしました。

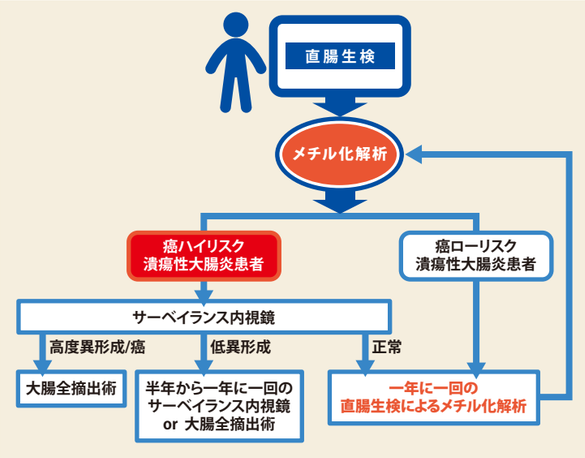


発表を行う問山 裕二医学系研究科教授



検査キット

潰瘍性大腸炎は、大腸の粘膜にびらんや潰瘍を伴う腸炎で、病因が解明されていないため根治不能で、難病指定されています。加えて、潰瘍性大腸炎は大腸癌が高率で発生し、罹患期間と関連することが知られています。そのため、長期罹患（8年以上）した潰瘍性大腸炎患者には、毎年、大腸内視鏡検査が推奨されていますが、潰瘍性大腸炎に発生する大腸癌は大腸粘膜に炎症を伴うため色調での判別が困難になり、診断が難しいものとなっています。また、潰瘍性大腸炎の長期罹患患者全員に検査を施工することは、医療経済的観点からも効率的ではないため、潰瘍性大腸炎患者の癌化リスクを評価できる低侵襲で精度の高い診断方法の確立が望まれていました。



開発された診断法では、肛門鏡および開発した検査キットを使用した直腸粘膜1㎜角程度の採取により、全大腸いたるところの大腸癌の発生リスクを評価することができます。このテストで陽性となった患者に対象を絞り、大腸内視鏡検査を実施することで、患者および医療経済の負担軽減に繋がります。2020年9月現在、症例集積が終わり全ゲノムメチル化解析中です。

本院では、このように心や身体の健康を蝕む様々な要因を解消し、老若男女の皆さまの笑顔が輝く明日をお守りできるよう願いを込め、日夜研究・開発を進めています。

人間性豊かな優れた医療人を育成

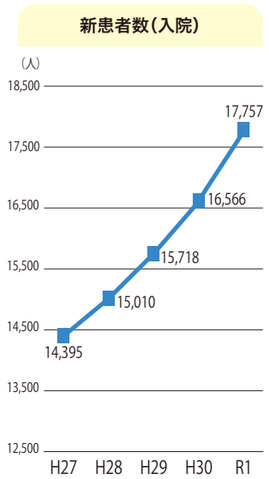
チーム医療シミュレーション

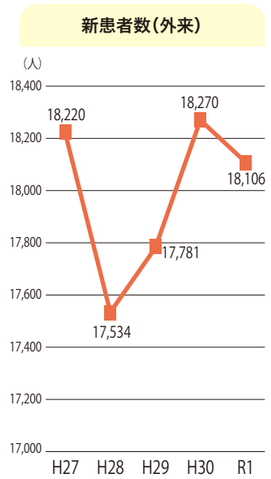
教育に関しては、県下唯一の医学部医学科（現在定員125名）、さらに看護学科（現在定員80名）の教育病院として医師・看護師養成に重要な機能を果たしています。医師の初期臨床研修（卒後2年間）に加え、2018年度より開始された専門医制度（3年間）においても、大学が中心となり医師の育成を行っています。看護師やメディカルスタッフの卒後教育、キャリア形成教育にも力を入れ、臨床研修・キャリア支援部を中心としてこれらの活動を推進しています。

創立75年を超える歴史がある県内唯一の大学病院として地域医療の充実、医師不足地域における医療の確保のため、県内の基幹病院などに、多くの医師派遣も行っています。

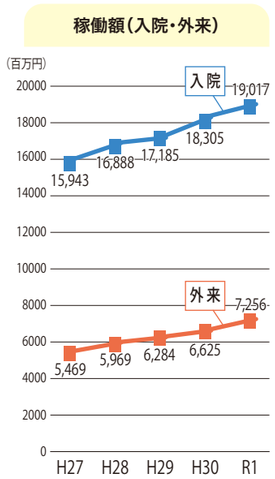
経営状況

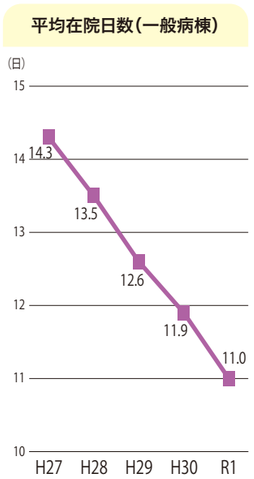
新患者数推移



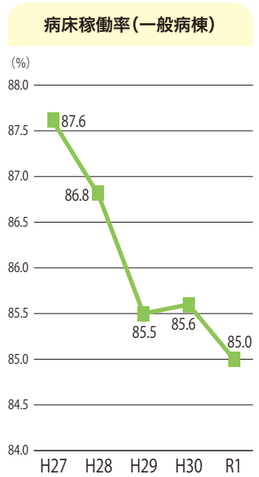


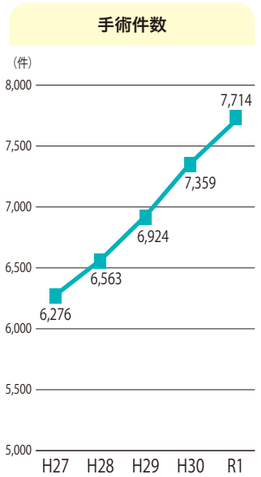
稼働額及び平均在院日数



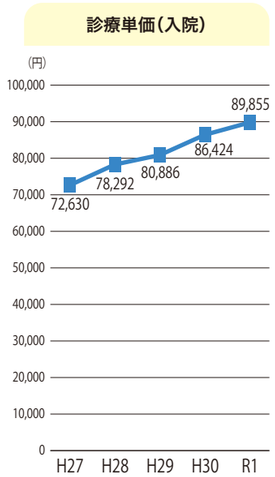


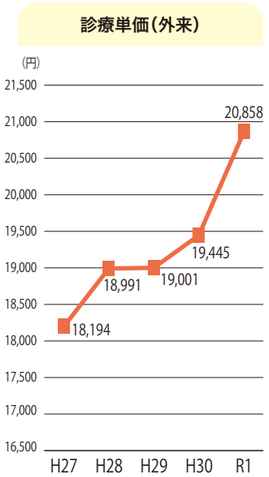
病床稼働額及び手術件数





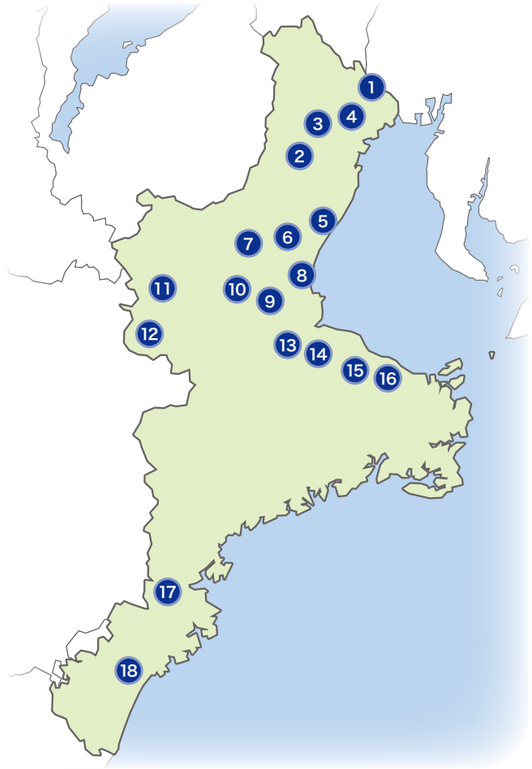
診療単価





地域医療情報体制の充実

本院は、がんをはじめとした地域連携クリニカルパスの円滑な運用及び県内における安心・安全かつ切れ目のない医療情報体制の充実を目指すことを目的に、ネットワーク回線を用いた医療連携システム、三重医療安心ネットワーク（ID LINK）を2010年より導入しております。導入当初は県内の拠点病院である本院（県がん診療連携拠点病院）の他、三重中央医療センター（県がん診療連携準拠点病院）、鈴鹿中央総合病院、松阪中央総合病院（地域がん診療連携拠点病院）、済生会松阪総合病院（県がん診療連携病院）の6施設において、個人情報を保護し、患者様から同意の得られた施設間に対し検査・処方データ、画像データ、各種レポートなどの診療情報を連携かかりつけ医療機関と共有できるように各々のサーバーを通じて開示する医療情報開示施設として開始しました。県内全域では、開示病院18施設、閲覧施設304施設、全登録件数23,227件にまで運用を拡大し、幅広く診療連携に活用されています。本院においては、2,577件の登録があり、主に病病連携に使用しています。（2020年3月末現在）



三重医療安心ネットワークに登録している医療機関は？

現在、医療情報開示病院として、以下18病院が登録されています。今後、がん診療連携拠点病院などを中心に拡充していく予定です。

また医療情報閲覧施設については、インターネット回線のある医療機関であればどこでも登録できるため、今後拡大していく予定です。

① 桑名市総合医療センター
② 三重県立総合医療センター
③ 市立四日市病院 地域連携・医療相談センター
④ 四日市羽津医療センター 地域連携室「すずらん」
⑤ 厚生連鈴鹿中央総合病院 地域連携室
⑥ 鈴鹿回生病院
⑦ 亀山市立医療センター
⑧ 三重大学医学部附属病院
⑨ 三重中央医療センター
⑩ 藤田医科大学 七栗記念病院
⑪ 上野総合市民病院
⑫ 名張市立病院
⑬ 厚生連 松阪中央総合病院
⑭ 済生会松阪総合病院
⑮ 伊勢赤十字病院
⑯ 市立伊勢総合病院
⑰ 尾鷲総合病院
⑱ 紀南病院

今後も、努力を重ね、診療、研究、教育、地域貢献および国際化など、新しい時代のニーズに応えられるような病院を創生していきます。

本部との連携

法人本部と附属病院が同一キャンパス内にあるため、高い連携力を発揮しています。

➡ 病院開催のマネジメント会議や科長会議等に学長・理事・監事等が定期的に出席し、病院経営や医療安全等の情報を共有しています。
➡ 役員会において病院の状況説明を病院長が実施しています。（月１回）
➡ 病院の収支状況説明のため、経営管理課長が事務局財務部に毎月報告を行っています。
➡ 学長を議長とする「病院経営戦略会議」を実施し、大学執行部や経営協議会委員を含む外部委員と病院執行部で意見交換を行っています。

決算状況

三重大学の令和元年度決算概要

国立大学法人は、「国立大学法人会計基準」に基づいて毎年度財務諸表を作成し、財政状態や運営状況などの財務情報を公表しています。

貸借対照表（B/S）（令和２年3月31日）

貸借対照表は、年度末（３月31日）時点の本学の財政状態（資産、負債及び純資産の状況）を表します。

貸借対照表の概要

- 資産は、747億3,900万円（前年度末比△14億3,200万円）となっております。校舎の改修、基幹整備等の増加要因があったものの、それ以上に「建物等」や「機械備品」等の減価償却の進行等があったため、資産が減少しました。
- 負債は、431億8,500万円（前年度末比△26億9,700万円）となっております。主に、償還による「借入金」の減少やR２年度４月払いとなる物件費等の未払金が減少したため、負債が減少しました。
- 純資産は、315億5,300万円（前年度末比＋12億6,500万円）となっております。国立大学法人等の業務に関連して発生した剰余金である利益剰余金が増加したため、純資産が増加しました。

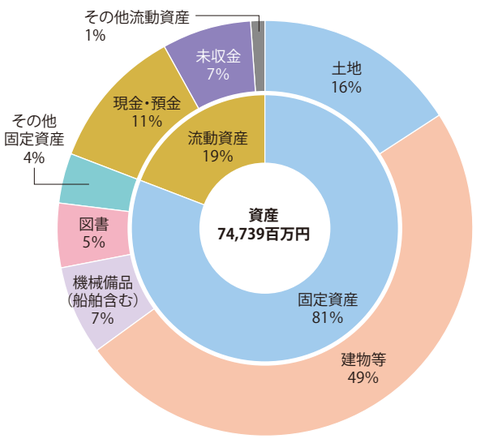
（百万円）

資産の部	H30	R1	増減
固定資産 A	62,925	**60,686**	**△ 2,239**
土　地	11,933	**11,911**	△ 21
建物等	37,919	**36,844**	△ 1,075
機械備品（船舶含む）	6,119	**5,117**	△ 1,001
図　書	4,019	**4,025**	5
美術品・収蔵品	22	**22**	0
車両運搬具	21	**31**	9
建設仮勘定	127	**15**	△ 111
無形固定資産	128	**93**	△ 34
投資その他資産	2,633	**2,625**	△ 8
流動資産 B	13,245	**14,053**	**807**
現金・預金	7,642	**8,224**	581
未収金	5,127	**5,327**	199
（うち附属病院収入）	(4,496)	**(4,594)**	(98)
（うち受託研究 他）	(631)	**(732)**	(101)
その他	475	**501**	26
合計 C（A+B）	76,171	**74,739**	**△ 1,432**

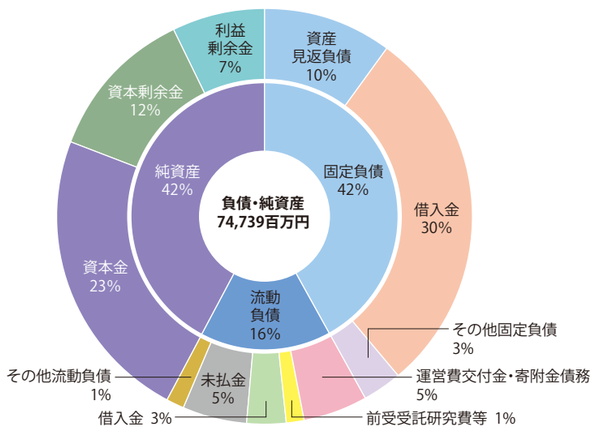
負債の部	H30	R1	増減
固定負債 D	34,085	**31,488**	**△ 2,597**
資産見返負債	7,928	**7,554**	△ 373
借入金	24,022	**22,039**	△ 1,982
リース債務	1,880	**1,603**	△ 276
その他	254	**290**	35
流動負債 E	11,797	**11,697**	**△ 100**
運営費交付金債務※1	70	**57**	△ 12
寄附金債務※1	3,464	**3,642**	178
前受受託研究費等	1,008	**1,051**	43
借入金	2,024	**1,982**	△ 42
未払金	4,307	**3,912**	△ 395
その他	921	**1,050**	128
負債 F（D+E）	45,883	**43,185**	**△ 2,697**
純資産の部			
資本金	17,485	**17,485**	0
資本剰余金	9,574	**9,271**	△ 302
利益剰余金	3,228	**4,796**	1,568
（うち目的積立金）	(637)	**(1,135)**	(498)
純資産 G	30,287	**31,553**	**1,265**
合計 H（F+G）	76,171	**74,739**	**△ 1,432**

※1：運営費交付金や授業料、寄附金は、国や国民等から負託された業務の財源であり、一旦、債務として負債に計上し、業務の進行に応じて、収益化を行う。

資産の構成内訳



負債・純資産の構成内訳



損益計算書（P/L）（平成31年4月1日～令和２年3月31日）

損益計算書は、一事業年度（4月1日～3月31日）における本学の運営状況（費用、収益の発生による損益状況）を表します。

損益計算書の概要

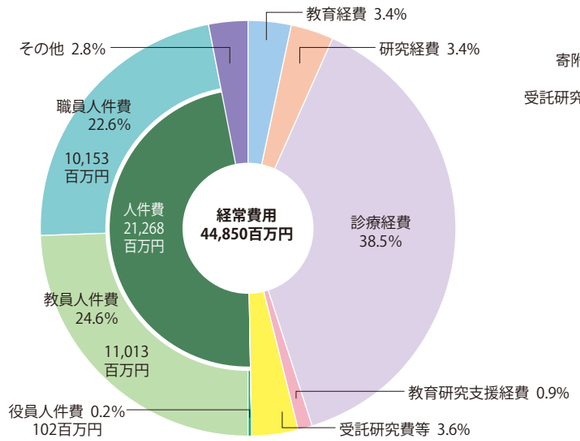
- 経常費用は、448億5,000万円（前年度比＋10億400万円）となっております。主に、診療稼働の増加による診療経費の増加や、メディカルスタッフの増員・常勤化により人件費が増加したため、経常費用が増加しました。
- 経常収益は、465億2,500万円（前年度比＋13億3,300万円）となっております。主に、附属病院収益の増加や、施設費の費用執行による施設費収益が増加したため、経常収益が増加しました。
- 当期総利益は、17億9,900万円（前年度比＋4億3,800万円）となっております。そのうち経営努力により生じた利益として、文部科学大臣の承認を受けた額は、翌期以降の事業の財源に充てられます。

（百万円）

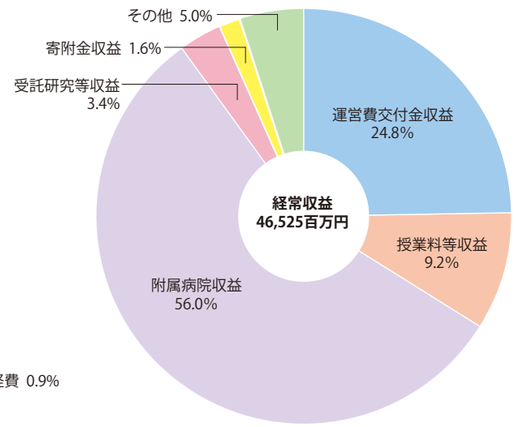
	H30	R1	増減
経常費用 I	43,845	**44,850**	**1,004**
教育経費	1,435	**1,505**	70
研究経費	1,492	**1,504**	11
診療経費	16,549	**17,252**	702
教育研究支援経費	411	**421**	10
受託研究費等	1,537	**1,595**	58
人件費	21,046	**21,268**	221
一般管理費	1,097	**1,080**	△ 17
財務費用	274	**221**	△ 52
経常利益 K（J－I）	1,347	**1,675**	328
臨時損失 L	10	**11**	**1**
当期総利益 O（J+M+N-I-L）	1,360	**1,799**	438
合計 P（I+L+O）	45,215	**46,660**	**1,444**

	H30	R1	増減
経常収益 J	45,192	**46,525**	**1,333**
運営費交付金収益	11,610	**11,538**	△ 71
授業料等収益	4,306	**4,262**	△ 43
附属病院収益	24,722	**26,072**	1,350
受託研究等収益	1,520	**1,590**	70
寄附金収益	731	**764**	32
補助金等収益	750	**671**	△ 79
施設費収益	46	**231**	184
資産見返負債戻入	819	**725**	△ 93
雑益	686	**668**	△ 18
臨時利益 M	14	**29**	**14**
積立金取崩額 N	8	**106**	**97**
合計 Q（J+M+N）	45,215	**46,660**	**1,444**

経常費用の構成内訳

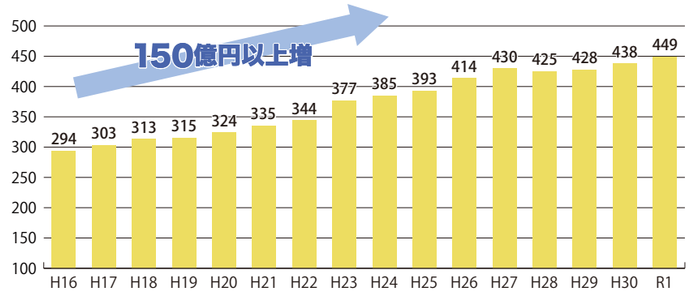


経常収益の構成内訳



経常費用の推移

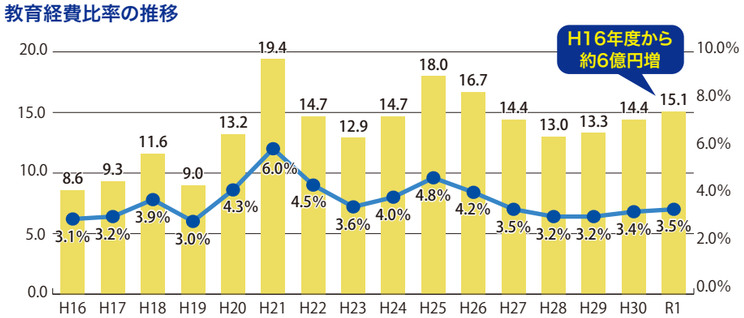
経常費用の推移(単位:億円)



ポイント

H16年の法人化以降、経常費用は150億円以上増加しています。
主な、費用の推移を下のグラフで紹介します。

教育経費比率の推移

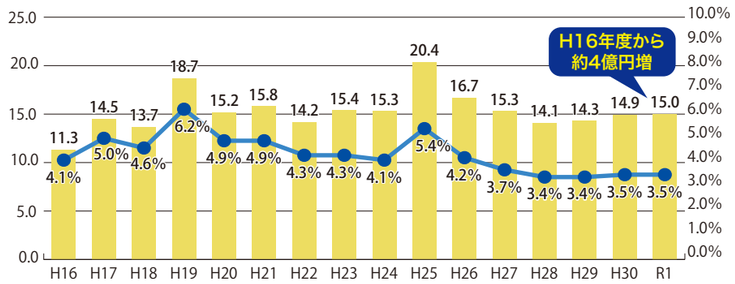


ポイント

学生の教育にかかる教育経費について、年度により大きな変動があるのは、例えば、H21年度であれば、附属学校校舎等教育関係施設の改修に伴い費用が増加しており、大きな事業があった年度は経費は大きくなります。
なお、教育経費比率について、数値が高いほど、学生の教育にかかる教育経費が大きいことを示します。
※H30年度の病院を有する同規模大学の平均値:4.4%

教育経費の推移(単位:億円)
教育経費比率(教育経費÷業務費)の推移

研究経費比率の推移

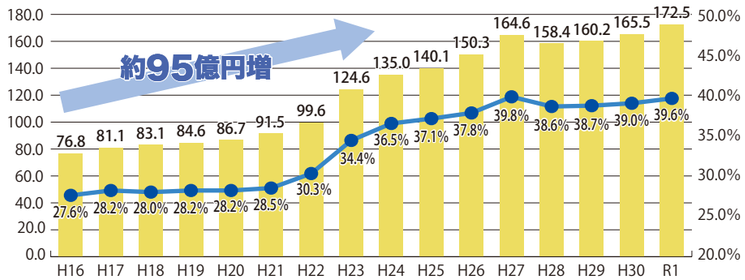


ポイント

研究にかかる研究経費について、年度により大きな変動があるのは、例えば、H25年度であれば、地域イノベーション研究開発拠点施設新築に伴い費用が増加しており、大きな事業があった年度は経費は大きくなります。
なお、研究経費比率について、数値が高いほど、教員の研究にかかる研究経費が大きいことを示します。
※H30年度の病院を有する同規模大学の平均値:4.6%

研究経費の推移(単位:億円)
研究経費比率(研究経費÷業務費)の推移

診療経費比率の推移



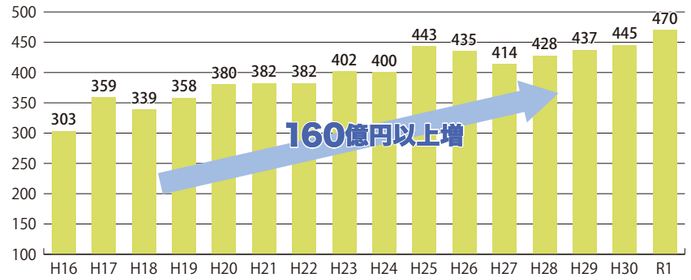
ポイント

診療稼働の増加に伴う、医薬品や医療材料等の購入の増加により、病院の診療にかかる診療経費は、増加しています。また、H23年度の新病棟、H27年度の新外来棟開院により、診療経費が大きくなっています。
なお、診療経費比率について、数値が高いほど、診療にかかる診療経費が大きいことを示します。
※H30年度の病院を有する同規模大学の平均値:35.6%

診療経費の推移(単位:億円)
診療経費比率(診療経費÷業務費)の推移

収入の推移

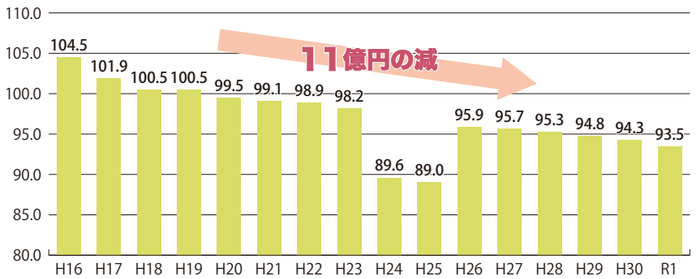
収入の推移※借入金除く(単位:億円)



ポイント

H16年度の法人化以降、収入は160億円以上増加しています。
施設整備費などの補助金措置等があった年度は、収入が大きくなります。
主な、収入内訳の推移を下のグラフで紹介します。

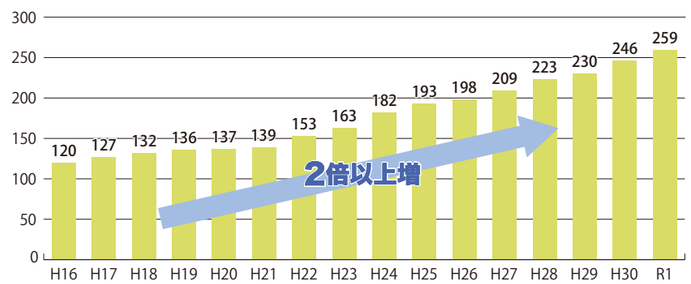
基盤的運営費交付金の推移(単位:億円)



ポイント

国から交付される資金である、運営費交付金は法人化以降、年々削減されており、法人化当初のH16年度と比べると11億円削減されております。
そのため、業務費の支出見直しの他、外部資金等の確保による自己収入の増収に努める必要があります。
※H24・25年度は給与改定臨時特例法による人件費相当額の減。

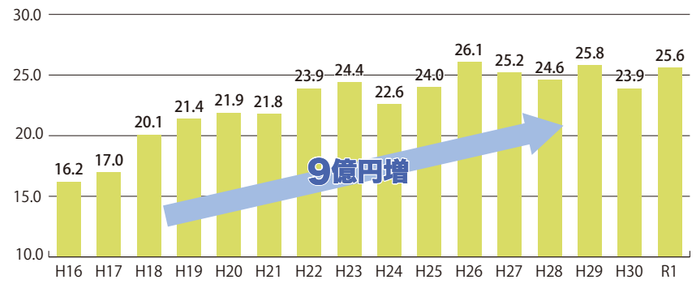
附属病院収入の推移(単位:億円)



ポイント

病院収入はR元年度は259億円で、法人化以降、稼働の増加で年々増加しています。
大学全体収入の半分以上を占めています。

産学連携等研究収入及び寄付金収入等の推移(単位:億円)

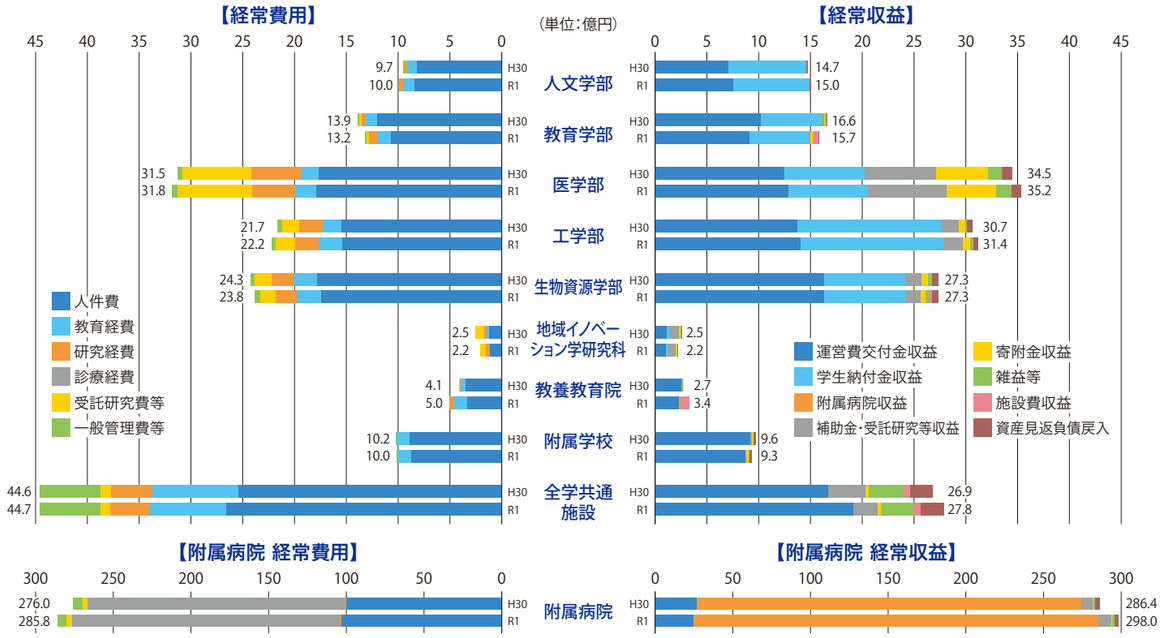


ポイント

運営費交付金が年々削減されていく中で、自己収入の確保において、外部資金の獲得はとても重要です。
県内企業を積極的に訪問したり、公開セミナーを開催したり等、外部資金の獲得拡大に取り組んでいます。

部局別セグメント情報の開示

経常費用と経常収益について、前事業年度と当事業年度の金額と構成比率を部局別に開示します。これにより、部局毎の規模や財政構成の違い、前年度との変化等を表します。



経常費用のTOPICS
（前事業年度と当事業年度における増減の主な要因）

- 教育学部：人件費の減少（退職手当、給与支給額の減）
- 教養教育院：教育経費の増加（校舎改修による増）
- 附属病院：人件費の増加（メディカルスタッフの増員・常勤化による増）、診療経費の増加（診療稼働の増加による増）

経常収益のTOPICS
（前事業年度と当事業年度における増減の主な要因）

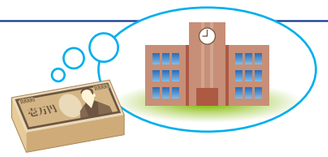
- 教育学部：運営費交付金収益の減少（人件費減に伴う減）
- 教養教育院：施設費収益の増加（校舎改修工事に伴う増）
- 附属病院：附属病院収益の増加（診療稼働の増加による増）

学生1人あたりの年間コスト

学生1人あたりの年間コスト	
教育研究	605,378円
教職員人件費	1,345,899円
施設設備	172,178円
一般管理費	104,932円
その他	14,966円

財源	
検定料 入学料、授業料	606,798円
その他 自己収入	219,694円
寄附金	105,258円
国による コスト負担	1,311,603円

合計 2,243,353円



病院・附属学校を除く、三重大学の学部等の運営に係る総コストを学生（学士、修士、博士、聴講生等）数7,296人（R元年5月1日時点）で除した学生1人あたりの年間コストは約224万円となります。財源のうち、学納金（検定料、入学料、授業料）は約61万円（約27%）であり、国から約131万円（約58%）を負担していただいております。

参考：国立大学法人の会計処理の特徴

国立大学法人の会計

国立大学法人会計は、企業会計原則を基本としていますが、教育・研究といった公共性や非独立採算を踏まえた国立大学法人会計基準を優先適用し、特有の会計処理を取り入れたものとなっています。

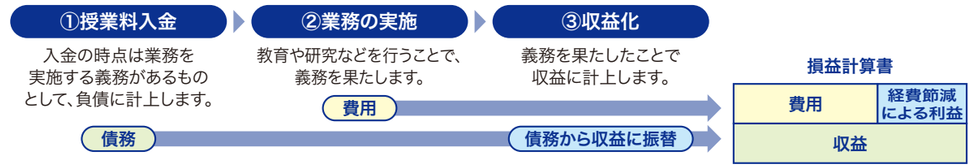
Ⅰ 国立大学法人会計の特徴

民間企業における会計の目的は、企業活動によって生じた利益を計算し、企業の利害関係者に対して『財政状態』と『経営成績』に関する情報を開示することになります。
それに対し、国立大学法人は、公的な性格を有し、主たる目的が教育・研究であり、学生納付金や附属病院収入等の業務実施のための財源が多様であるといった特性があるため、会計の目的は、『財政状態』と『運営状況』を開示することになります。

Ⅱ 損益均衡を前提とした会計処理

（1）収益化の会計処理

国立大学は運営費交付金や学生からの授業料などを財源として業務を行っております。
運営費交付金や授業料は、受け入れた時は収益として計上せず、将来の業務を行う義務として債務として認識します（下の図①）。
これらの債務は、業務を実施することで（下の図②）、義務を果たしたものとして収益に振り替えます（下の図③）。



（2）固定資産の減価償却

運営費交付金などにより固定資産を取得した場合、固定資産と同額の運営費交付金債務を負債科目の「資産見返負債」へ振り替えます。減価償却費を計上する都度、同額を資産見返負債から収益科目の「資産見返負債戻入」に振り替えることによって損益を均衡させる会計処理を行います。

Ⅲ 国立大学法人の利益処分

国立大学法人が獲得した利益のうち、国立大学法人の経営努力により生じたと文部科学大臣から認定された額については、中期計画で定める使途に充てるために目的積立金として積み立てます。

統合報告書はWEBでもご覧いただけます

三重大学統合報告書

http://www.mie-u.ac.jp/profile/guide/post-5.html

その他のご案内

▶財務諸表等　http://www.mie-u.ac.jp/disclosure/finance.html

▶三重大学概要　http://www.mie-u.ac.jp/report/about.html

▶三重大学案内　http://www.mie-u.ac.jp/exam/faculty/univ-information/

▶環境報告書　http://www.gecer.mie-u.ac.jp/env_report/index.html

▶三重大学全学シーズ集　http://www.crc.mie-u.ac.jp/seeds/

▶三重大学ホームページ　http://www.mie-u.ac.jp/